

國學院大學學術情報リポジトリ

ミレニアムを通過した新聞ジェンダー表現の現在(その2) :

第五回調査データの多変量解析と投書欄、テレビ面・ラジオ面、「少年」の用法の分析を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田中, 和子, 女性と新聞メディア研究会 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001114

ミレニアムを通過した新聞ジェンダー表現の現在(その2)
—— 第五回調査データの多変量解析と投書欄、テレビ面・ラジオ面、
「少年」の用法の分析を中心に——

田 中 和 子
女性と新聞メディア研究会

はじめに

I 新聞銘柄、掲載紙面、紙面ジャンルからみたジェンダー表現のクロス分析と多変量解析

1 女性冠詞・男性冠詞

2 ジェンダーを含み込んだ職業語

3 他者との関係で女性・男性があらわされる

ことば

4 「さん」と「氏」の使い分け

II 投書欄にみるジェンダー表現

1 投書欄の性質とジェンダー表現分析の意義

おわりに

III

2 読者が使用するジェンダー表現

テレビ面・ラジオ面にみるジェンダー表現

1 テレビ面・ラジオ面の性質とジェンダー表現分析の意義

2 テレビ・ラジオが好むジェンダー表現

IV 「少年」とは誰か

1 「標準」としての男性

2 新聞紙面における「少年」の用法

3 新聞紙面における「青年」の用法

はじめに

本稿は、「新聞紙面にあらわれたジェンダー」第五回調査のデータに基づく研究報告の第二報である。

前稿「ミレニアムを通過した新聞ジェンダー表現の現在」(『国学院法学』第四六巻第四号、二〇〇九年三月所収)においては、一九八六年以降、五年ごとに続行してきた新聞紙面の量的分析の基本軸を踏襲する形で、二〇〇六年一〇月一日から一五日にかけての朝日新聞・毎日新聞・読売新聞の朝刊・夕刊における、女性冠詞と男性冠詞を含む性別冠詞、ジェンダーを含み込んだ職業語、他者との関係で女性と男性があらわされることは、ジェンダー・ステレオタイプ表現、女性隠し表現、ダブルスタンダード表現の使用状況を分析・把握するとともに、過去のデータとの比較を試みた。⁽¹⁾

本稿では、まず、前稿で既に報告したジェンダー強調表現である「性別冠詞」および「ジェンダーを含み込んだ職業語」、次に「他者との関係で女男があらわされることば」、そして「ダブルスタンダード表現」の典型である「さん」と「氏」の使い分けに関し、その元となったデータに、さらに新聞銘柄、掲載紙面、紙面ジャンルを変数に加えた三重クロス集計や多変量解析をほどこすことで、右記の表現とこれらの変数がどのように関連するのかを把握することを試みた。

次に、〇六年の第五回調査から新たに加えた投書欄とテレビ・ラジオ面における「性別冠詞」「ジェンダーを含み込んだ職業語」「他者との関係で女男があらわされることば」「ステレオタイプ表現」の集計結果の分析を行う。さらに、前稿、前々稿で論じた「サラリーマン」同様、暗に男性を「人間の標準」とみなす表現方法としての「少

年」「青年」の使用状況の分析を行い、その問題点を考察したい。

I 新聞銘柄、掲載紙面、紙面ジャンルからみたジェンダー表現のクロス分析と多変量解析

1 女性冠詞・男性冠詞

(1) 変数としての新聞銘柄、掲載紙面、紙面ジャンル

新聞におけるジェンダー表現には、以下に示した三つの基本類型がある。本調査では、これまで一貫して、これらを軸にすえ、投書欄、テレビ・ラジオ面、小説および広告を除いた新聞紙面の量的な分析を行ってきた。

一 女性を強調する表現(女性冠詞、女性の性を含み込んだ職業語、他者との関係であらわされる語、女性に対するステレオタイプ表現)

二 女性が隠される表現(男性が世帯や家族を代表する表現、女性が男性に付随ないし従属させられた表現)

三 女性と男性とで扱いの規程が異なるダブルスタンダード表現(女性を業績や地位で扱わない表現、女性と男性とで異なる敬称の使用、女性を名のみ、男性を姓または姓名であらわす表現)

などである。

この章では、これまで過去に行ってきた分析軸の中から、量的にも多い「女性強調の表現」と「ダブルスタンダード表現」に着目し、①女性の性を強調する「女○○」「女子○○」「女性○○」「女流○○」など女性冠詞のつく

語と、男性冠詞のつく語、②「看護婦」や「OL」、「サラリーマン」「神父」といったジェンダーを含みこんだ職業語、③「夫人」「嫁」や「主人」「婿」など他者との関係で女性・男性が表現される語、そして女性と男性で扱いが異なるダブルスタンダード表現の典型としての④性別による「さん」と「氏」の使い分けについて、(a)新聞銘柄、(b)掲載紙面、(c)紙面ジャンル、の三つを変数として分析する。

(a)「新聞銘柄」については、女性とメディア研究会がこれまで調査をおこなってきた、朝日、毎日、読売の三銘柄を引き続き用いることで継続性をもたせた。また、

(b)社会面、生活面といった「掲載紙面」は、本研究会が二〇〇一年の第四回調査で分析したように、記事が掲載された紙面によって特有のジェンダー表現がみられることから、重要な変数とみなされる。⁽²⁾

(c)紙面ジャンルは、後述するように、掲載紙面を、政治・経済系、生活・文化系、社会系の三つの大きなカテゴリーにまとめたものである。

なお、前稿にも記したように、⁽³⁾これらの分析のために、該当するすべてのジェンダー表現につき、新聞銘柄、日付、掲載紙面名、掲載ページ、記事タイトルなどの属性を表計等ソフトウェア「Excel」に入力し、データベース化して用いた。

以下では、まず新聞銘柄別・掲載紙面別にクロス集計結果を示したのち、多変量解析の結果をみることで、先の①④の各表現が、どのような場合にあらわれやすいのかを検証してゆきたい。多変量解析は、本調査のように、多数の変数がかかわる場合には、有効な手段である。

本調査で収集したデータは、多数の質的変数（カテゴリー）がかかわるため、それに適した多変量解析法として、コレスポネンズ分析（対応分析）を使用した。対応分析は、フランスのジャン＝ポール・ベンゼクリにより

表1 紙面の分類と紙面ジャンル

	掲載紙面	紙面ジャンル
1	1面	政治・経済系
2	総合・政治	
3	国際	
4	経済	
5	科学	
6	教育	生活・文化系
7	生活	
8	文化・メディア	
9	地域	
10	スポーツ	社会系
11	社会	

提唱された方法で、質的データの主成分分析ととらえることができ、林知己夫によって提案された数量化Ⅲ類と同等の手法である⁽⁴⁾。使用した統計ソフトは、SPSS (IBM SPSS Statistics Ver. 17) である。

コレスポンデンス分析では、変数同士の関係が視覚化されて、平面上にプロットされるため、細かい数値が幾重にもかさなるクロス集計よりも、変数間の関係がひと目でわかるという利点がある。布置図上に上下左右の二つの軸によりつくられる次元1と次元2は、変数の相対的關係から抽出されたものである。この分析方法では、プロットされた変数がどのような布置をつくり出しているかという、相対的な位置関係をみることに主眼があり、次元(軸)の解釈は、意味づけができる場合にのみ行われる。

各変数は、以下のように細分化し、入力・集計にあたってコード化した。

まず、掲載紙面名は各紙で名称が異なり、また朝刊と夕刊もあることから、三紙・朝夕刊共通の紙面名を策定、表1のように一一種類とした。ただし、この分類はかなり細かく、カテゴリーによっては該当する件数がゼロまたは非常に少ないものがあるため、多変量解析にかけるにあたっては、大局的な観点からデータをとらえるために、これらをさらに大きく三分類にくくった変数も用いた。それが表1の右に掲げた紙面ジャンルである。

- (a) 新聞銘柄……朝日新聞、毎日新聞、読売新聞(三銘柄)
 - (b) 掲載紙面……一面、総合・政治、国際、経済、科学、教育、生活、文化・メディア、地域、スポーツ、社会(一一種類)
 - (c) 紙面ジャンル……政治・経済系、生活・文化系、社会系(三ジャンル)
- なお、「一面」と「総合・政治」面については、便宜的に「政治・経済系」

ジャンルに類別してあるものの、ニュース・バリューや特集などの要因によって「政治・経済」以外の別種の記事も含まれるため、結果の解釈においては注意が必要である。また、本稿では「新聞銘柄」を「紙名」、「掲載紙面」を単に「紙面」と表記する場合がある。

(2) 性別を〃徴づける〃女性冠詞

まず最初に、登場人物に性別を示す〃かんむり〃をつけて女性・男性を〃徴づける〃表現である、「女○○」「女子○○」「女性○○」「女流○○」と、「男○○」「男子○○」「男性○○」「男流○○」についての分析を行う。これら性別を〃徴づける〃表現は、新聞における表現の〃ジェンダー度〃を測るひとつの指標になるといえる。最近は、「腐女子」のように、〃かんむり〃ではなく、語の後方に性別を示す要素がつくものやそれ以外の新語も登場し、それはそれで注目される現象ではあるが、〃かんむり〃がつくり出す表現は、語構成や表現上の機能という点で変化に富み、また、女性冠詞と男性冠詞のつく語の種類の間での体系的な比較も可能であるという点で、優れた指標になりうると考えられる。

新聞では、文字数を圧縮するために、単語を結合して臨時的な語をつくり出すということが、しばしば行われている。これは専門的には「臨時一語」と呼ばれる。⁽⁵⁾「臨時一語」とは、本来独立して用いられる二つ以上の単語が、何らかの必要により合わさって、一時的に一つの単語となったものである。多くはそのまま定着せず消えてゆくが、日本語の語彙の一部となって定着するものもある。実際に紙面で使われたジェンダー表現を例にとれば、「女性独身パート」は、「女性」と「独身」と「パート」が一時的に結合したものであるとみられる。これは「女性の独身パート」、「独身の女性パート」などともいい換えができるうちは、本当に「臨時」の語とみることができ

る。だが、後にみるように、その特定の組み合わせが何度も使われている場合には、もはや臨時的なものとは考えられず、ひとつの語として日本語の語彙の一部となったとみることが出来る。

臨時的につくられた語が社会で定着してゆく中で、女性を示す要素がいつしか“かんむり”のように常態化するならば問題である。たとえば、「女性の医師」を圧縮して「女性医師」とした場合、たしかに一文字を圧縮するメリットはあるわけだが、そのように文字数を圧縮するのなら、そもそも「女性」という要素が情報として必須なのかどうか、まず問われなければなるまい。それが必要な情報であるならば、「男性」についても同等の取り扱いをするべきである。

さらに女性冠詞の中には、今述べたような複合語より一層根深いジェンダー表現となっているものがある。たとえば、“女”をかんむりにつけたことばのうち、漢語系の“ジョ”と読むものは、ジョだけを切り離しても単語としては成立しないという意味で、性別が強く結合していると考えられ、言語学では「拘束形態素」と呼ばれている。たとえば、「女医」と「女性医師」を比較してみると、前者では、医師が性別と一体として示され、“女”を切り離して「医」という単語を残した場合、意味が通らないのに対し、後者では、「女性」は分離可能である。また、「男性医師」ということばはあっても「男医」という語はほとんどみかけることがない、という点でも対称性に違いがある。⁶⁾

一方、「女医」を「女性医師」にいい換えたとしても、のちにみるように「男性医師」と使用頻度が著しく違っているのなら、「女医」のもっていた性別による非対称な関係が、この表現にも隠れていることがわかるであろう。また、女性冠詞のもつ「造語力」、つまり新しくことばをつくる力の大きさについても、ここで述べておきたい。ジェンダーにとらわれない表現をめざすためには、性別冠詞の使用が少なくなり、消えてゆくことがひとつの目標

になるが、そのジェンダーを示すそれぞれの“かんむり”、すなわち「女〇〇」、「女子〇〇」、「女性〇〇」、「女流〇〇」が、どの程度の「繁殖力」を持つかが問題となろう。もし、ある“かんむり”(たとえば「女〇〇」)の繁殖力がすでに衰えており、もはや新しい語を作り出すことができないのであれば、「女医」、「女優」など、固定化した女性冠詞つき表現を、「使わないことば」としてリストアップしたガイドラインを作成することが有効であろう。それに対し、造語力の強いジェンダー冠詞は、前述のように次々と臨時一語をつくり出し、多種多様で幅広い表現を生み出す。そして、そのうちの一部は、のちに定着して固定したジェンダー表現となるのである。このように造語力が強い場合には、ジェンダー表現をつくり出している、その根っ子を押さえるしか方法がない。そうするためには、まず、それぞれのジェンダー冠詞が、どの程度の造語力をもつのかを観察することが必要であろう。

このジェンダー冠詞の造語力をみるには、ジェンダー冠詞が記事中で何回使われたかの総数を数えると同時に、ジェンダー冠詞がどの程度の種類を持っているのかを数えあげることが有効である。前者は「のべ語数」、後者は「異なり語数」と呼ばれている。以下では適宜この二種類の語数をみることで、造語力について観察してゆきたい。

(3) クロス集計にみる性別冠詞の使用状況

調査期間中の「女性冠詞」「男性冠詞」の出現頻度を、新聞銘柄別と掲載紙面別にみたのが表2であり、各銘柄別と紙面ジャンル別については表3に示した。

まず、全体として「女性冠詞」と「男性冠詞」の使用頻度を比較すると、六〇一件対二八七件で、およそ二対一の出現比率となり、明白な非対称性がみとめられた。

次に、表2をみると、性別冠詞の使用頻度は掲載紙面によって大きく異なることが明らかである。全体を通し

て、「文化・メディア」「スポーツ」「社会」などに掲載された、比較的「軟らかめ」の記事中では、女性冠詞・男性冠詞ともに使用頻度が高い。一方、「一面」「総合・政治」「経済」「科学」など「硬め」の記事では頻度がぐっと少なくなる。記事の内容が個人を離れ、公的な性格をおびればおびるほど、性別冠詞があらわれにくくなるのは当然ともいえるが、のちに示すように、これらの紙面では、人物が登場する場合でも、男性が無冠詞で表現されるケースが多いことが影響していると推測される。

本格的な分析は多変量解析にゆずるとして、クロス集計の段階で明らかになった点について、概観しておきたい。

第一に、性別冠詞の種類が、「女」あるいは「男」の場合、毎日新聞は、他紙に比べ、それらの出現比率に不均等さが目立つ。まず、「文化・メディア」で「女」が四〇件、掲載紙面に占める割合が三五・四%あるのに対し、「男」は〇件である。また、「社会」では、「女」が四二件、上記割合が三七・二%で「男」は二八件、六二・二%である。出現度数では女性の方が多いが、構成比で考えると、後者は掲載紙面全体の中で、大きな割合を占めている。また、「国際」は「女」が四件、三・五%で「男」は七件、一五・六%と、同様に比率では後者の存在が大きい。

次に、「女子」「男子」冠詞の場合についてみると、新聞銘柄により、性別に偏りがある掲載紙面に違いがみられる。朝日では、「女子」「男子」の順で数字を対比させると、「文化・メディア」二〇件、二三・八%対〇件、〇%、「地域」八件、一九・〇%対〇件、〇%、「社会」一七件、四〇・五%対一六件、八四・二%が比率差の大きい紙面である。また、毎日では、「生活」一四件、二三・〇%対〇件、〇%、「地域」〇件、〇%対四件、一一・四%、読売では、「生活」五件、一〇・九%対〇件、〇%、「社会」二九件、六三・〇%対三四件、八七・二%での偏りが大

表 2 掲載紙面・新聞銘柄別にみた「女性冠詞」「男性冠詞」の出現頻度

(単位: 件、()内は%)

新聞銘柄	性別冠詞	1 面	総合・政治	国際	経済	科学	教育	生活	文化・メディア	地域	スポーツ	社会	合 計
朝日	女	0 (0.0)	3 (4.2)	2 (2.8)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (2.8)	1 (1.4)	25 (34.7)	7 (9.7)	2 (2.8)	30 (41.7)	72 (100.0)
	男	0 (0.0)	2 (11.1)	1 (5.6)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (5.6)	6 (33.3)	2 (11.1)	6 (33.3)	18 (100.0)
毎日	女	0 (0.0)	14 (12.4)	4 (3.5)	1 (0.9)	0 (0.0)	0 (0.0)	3 (2.7)	40 (35.4)	4 (3.5)	5 (4.4)	42 (37.2)	113 (100.0)
	男	1 (2.2)	5 (11.1)	7 (15.6)	1 (2.2)	0 (0.0)	1 (2.2)	2 (4.4)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	28 (62.2)	45 (100.0)
読売	女	0 (0.0)	3 (3.2)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	6 (6.5)	8 (8.6)	24 (25.8)	9 (9.7)	4 (4.3)	39 (41.9)	93 (100.0)
	男	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (16.7)	3 (50.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (33.3)	6 (100.0)
〃女/男、冠詞小計	女	0 (0.0)	20 (7.2)	6 (2.2)	1 (0.4)	0 (0.0)	8 (2.9)	12 (4.3)	89 (32.0)	20 (7.2)	11 (4.0)	111 (39.9)	278 (100.0)
	男	1 (1.4)	7 (10.1)	8 (11.6)	1 (1.4)	0 (0.0)	1 (1.4)	3 (4.3)	4 (5.8)	6 (8.7)	2 (2.9)	36 (52.2)	69 (100.0)
朝日	女子	3 (7.1)	0 (0.0)	1 (2.4)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (2.4)	10 (23.8)	8 (19.0)	2 (4.8)	17 (40.5)	42 (100.0)
	男子	0 (0.0)	1 (5.3)	0 (5.3)	1 (5.3)	0 (0.0)	1 (5.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	16 (84.2)	19 (100.0)
毎日	女子	5 (8.2)	4 (6.6)	4 (6.6)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	14 (23.0)	12 (19.7)	0 (0.0)	0 (0.0)	22 (36.1)	61 (100.0)
	男子	2 (5.7)	2 (5.7)	1 (2.9)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (5.7)	0 (0.0)	5 (14.3)	4 (11.4)	0 (0.0)	19 (54.3)	35 (100.0)
読売	女子	0 (0.0)	2 (4.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (2.2)	5 (10.9)	5 (10.9)	3 (6.5)	1 (2.2)	29 (63.0)	46 (100.0)
	男子	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (5.1)	3 (7.7)	0 (0.0)	34 (87.2)	39 (100.0)
〃女子/男子冠詞小計	女子	8 (5.4)	6 (4.0)	5 (3.4)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (0.7)	20 (13.4)	27 (18.1)	11 (7.4)	3 (2.0)	68 (45.6)	149 (100.0)
	男子	2 (2.2)	3 (3.2)	1 (1.1)	1 (1.1)	0 (0.0)	3 (3.2)	0 (0.0)	7 (7.5)	7 (7.5)	0 (0.0)	69 (74.2)	93 (100.0)
朝日	女性	1 (2.6)	4 (10.5)	7 (18.4)	2 (5.3)	1 (2.6)	0 (0.0)	6 (15.8)	6 (15.8)	2 (5.3)	1 (2.6)	8 (21.1)	38 (100.0)
	男性	0 (0.0)	6 (20.7)	0 (0.0)	1 (3.4)	1 (3.4)	0 (0.0)	4 (13.8)	1 (3.4)	5 (17.2)	0 (0.0)	11 (37.9)	29 (100.0)
毎日	女性	2 (3.2)	8 (12.7)	7 (11.1)	2 (3.2)	0 (0.0)	0 (0.0)	8 (12.7)	15 (23.8)	7 (11.1)	1 (1.6)	13 (20.6)	63 (100.0)
	男性	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (4.2)	2 (4.2)	4 (8.3)	0 (0.0)	40 (83.3)	48 (100.0)
読売	女性	1 (1.5)	2 (2.9)	6 (8.8)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (1.5)	15 (22.1)	23 (33.8)	6 (8.8)	0 (0.0)	14 (20.6)	68 (100.0)
	男性	3 (6.3)	1 (2.1)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	4 (8.3)	1 (2.1)	2 (4.2)	9 (18.8)	0 (0.0)	28 (58.3)	48 (100.0)

女性/男性冠詞小計	女性	4 (2.4)	14 (8.3)	20 (11.8)	4 (2.4)	1 (0.6)	1 (0.6)	29 (17.2)	44 (26.0)	15 (8.9)	2 (1.2)	35 (20.7)	169 (100.0)
	男性	3 (2.4)	7 (5.6)	0 (0.0)	1 (0.8)	1 (0.8)	4 (3.2)	7 (5.6)	5 (4.0)	18 (14.4)	0 (0.0)	79 (63.2)	125 (100.0)
朝日	女流	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (00.0)
毎日	女流	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	4 (100.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	4 (100.0)
読売	女流	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (100.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (100.0)
女性冠詞小計	女流	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (20.0)	4 (80.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	5 (100.0)
朝日	女性冠詞合計	4 (2.6)	7 (4.6)	10 (6.6)	2 (1.3)	1 (0.7)	2 (1.3)	8 (5.3)	41 (27.0)	17 (11.2)	5 (3.3)	55 (36.2)	152 (100.0)
	男性冠詞合計	0 (0.0)	9 (13.6)	1 (1.5)	2 (3.0)	1 (1.5)	1 (1.5)	4 (6.1)	2 (3.0)	11 (16.7)	2 (3.0)	33 (50.0)	66 (100.0)
毎日	女性冠詞合計	7 (2.9)	26 (10.8)	15 (6.2)	3 (1.2)	0 (0.0)	0 (0.0)	25 (10.4)	67 (27.8)	15 (6.2)	6 (2.5)	77 (32.0)	241 (100.0)
	男性冠詞合計	3 (2.3)	7 (5.5)	8 (6.3)	1 (0.8)	0 (0.0)	3 (2.3)	4 (3.1)	7 (5.5)	8 (6.3)	0 (0.0)	87 (68.0)	128 (100.0)
読売	女性冠詞合計	1 (0.5)	7 (3.4)	6 (2.9)	0 (0.0)	0 (0.0)	8 (3.8)	28 (13.5)	53 (25.5)	18 (8.7)	5 (2.4)	82 (39.4)	208 (100.0)
	男性冠詞合計	3 (3.2)	1 (1.1)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	4 (4.3)	2 (2.2)	7 (7.5)	12 (12.9)	0 (0.0)	64 (68.8)	93 (100.0)
総計	女性冠詞合計	12 (2.0)	40 (6.7)	31 (5.2)	5 (0.8)	1 (0.2)	10 (1.7)	61 (10.1)	161 (26.8)	50 (8.3)	16 (2.7)	214 (35.6)	601 (100.0)
	男性冠詞合計	6 (2.1)	17 (5.9)	9 (3.1)	3 (1.0)	1 (0.3)	8 (2.8)	10 (3.5)	16 (5.6)	31 (10.8)	2 (0.7)	184 (64.1)	287 (100.0)

きい。

女性 男性 冠詞については、「国際面」で三紙に違いがみられ、朝日四件、一〇・五％対六件、二〇・七％、毎日二件、三・二％対〇件、〇％、読売一件、一・五％対三件、六・三％とまちまちである。一方、「文化・メディア」では、朝日六件、一五・八％対一件、三・四％、毎日一五件、二三・八％対二件、四・二％、読売二三件、三三・八％対二件、四・二％と、いずれの新聞においても性別による違いがみられた。「社会」でも、「文化・メディア」同様、朝日八件、二一・一％対一件、三七・九％、毎日一三件、二〇・六％対四〇件、八三・三％、読売一四件、二〇・六％対二八件、五八・三％と、差がみられた。

「女流」については、毎日の「地域」で四件、読売の「文化・メディア」で一件用いら

れていただけである。一方、「男流」という用例は皆無であった。

次に、表 3 から、女性冠詞を紙面ジャンル別にみてみよう。まず、「女」がかんむりにつくことばは、三紙合計で「生活・文化系」が一四〇件、紙面ジャンルに占める割合は五〇・四%、「社会系」が一一一件、三九・九%と多く、「政治・経済系」では二七件、九・七%にとどまっている。記事の「硬軟」で対照させてみると、「女」冠詞は「軟らかい」記事に多い、とくくることができよう。「生活・文化系」の中の芸能関係で「女優」の使用が、スポーツで「女王」が、「社会系」では「女兒」が、それぞれ多かった。

また、「女子」がかんむりにつくことばについてみると、これも「社会系」で六八件、四五・六%、「生活・文化系」で六二件、四一・六%と多く、「政治・経済系」は一九件、一二・八%となっており、「女」冠詞と似た分布を示している。この「女子」冠詞つきの主要なことばは、「女子高生」「女子生徒」「女子大生」などであり、学校の生徒・学生が「生活・文化系」と「社会系」に登場する率が高いことによる。

これらに対し、「女性」がかんむりにつくことばは、「政治・経済系」で四三件、二五・二%と使用率が高くなっている。これは、「女性医師」「女性記者」「女性教諭」など、成人の、専門的な職業に就く女性に関する用例が多いことを反映している。女性の社会進出にもない、政治・経済分野で女性の活躍が目立つのはよいとして、後に見るように、男性冠詞とは非対称で、その目立ち方が、「有徴の性」としてのものであることは問題である。

「その他」のカテゴリーに属するものは「女流」がかんむりにつく語だけであったが、これらはすべて「生活・文化系」に登場していた。

同じく表 3 で、男性冠詞の分布をみると、「社会系」での使用比率が女性よりも高く、「男」がかんむりにつく語は三六件、紙面ジャンルに占める割合は五二・二%、「男子」がかんむりにつく語は、六九件、七四・二%に及ん

13 ミレニアムを通過した新聞ジェンダー表現の現在(その2)(田中和子ほか)

表3 紙面ジャンル・新聞銘柄別にみた「女性冠詞」「男性冠詞」の出現頻度
(単位:件、()内は%)

性別冠詞	新聞銘柄	政治・経済系	生活・文化系	社会系	合 計
女	朝日	5 (6.9)	37 (51.4)	30 (41.7)	72 (100.0)
	毎日	19 (16.8)	52 (46.0)	42 (37.2)	113 (100.0)
	読売	3 (3.2)	51 (54.8)	39 (41.9)	93 (100.0)
	〃女、冠詞 小 計	27 (9.7)	140 (50.4)	111 (39.9)	278 (100.0)
男	朝日	3 (16.7)	9 (50.0)	6 (33.3)	18 (100.0)
	毎日	14 (31.1)	3 (6.7)	28 (62.2)	45 (100.0)
	読売	0 (0.0)	4 (66.7)	2 (33.3)	6 (100.0)
	〃男、冠詞 小 計	17 (24.6)	16 (23.2)	36 (52.2)	69 (100.0)
女子	朝日	4 (9.5)	21 (50.0)	17 (40.5)	42 (100.0)
	毎日	13 (21.3)	26 (42.6)	22 (36.1)	61 (100.0)
	読売	2 (4.3)	15 (32.6)	29 (63.0)	46 (100.0)
	〃女子、冠詞 小 計	19 (12.8)	62 (41.6)	68 (45.6)	149 (100.0)
男子	朝日	2 (10.5)	1 (5.3)	16 (84.2)	19 (100.0)
	毎日	5 (14.3)	11 (31.4)	19 (54.3)	35 (100.0)
	読売	0 (0.0)	5 (12.8)	34 (87.2)	39 (100.0)
	〃男子、冠詞 小 計	7 (7.5)	17 (18.3)	69 (74.2)	93 (100.0)
女性	朝日	15 (39.5)	15 (39.5)	8 (21.1)	38 (100.0)
	毎日	19 (30.2)	31 (49.2)	13 (20.6)	63 (100.0)
	読売	9 (13.2)	45 (66.2)	14 (20.6)	68 (100.0)
	〃女性、冠詞 小 計	43 (25.4)	91 (53.8)	35 (20.7)	169 (100.0)
男性	朝日	8 (27.6)	10 (34.5)	11 (37.9)	29 (100.0)
	毎日	0 (0.0)	8 (16.7)	40 (83.3)	48 (100.0)
	読売	4 (8.3)	16 (33.3)	28 (58.3)	48 (100.0)

	“男性”冠詞 小 計	12 (9.6)	34 (27.2)	79 (63.2)	125 (100.0)
女流	朝日	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
	毎日	0 (0.0)	4 (100.0)	0 (0.0)	4 (100.0)
	読売	0 (0.0)	1 (100.0)	0 (0.0)	1 (100.0)
	“女流”冠詞 小 計	0 (0.0)	5 (100.0)	0 (0.0)	5 (100.0)
女性冠詞合計	朝日	24 (15.8)	73 (48.0)	55 (36.2)	152 (100.0)
	毎日	51 (21.2)	113 (46.9)	77 (32.0)	241 (100.0)
	読売	14 (6.7)	112 (53.8)	82 (39.4)	208 (100.0)
	総 計	89 (14.8)	298 (49.6)	214 (35.6)	601 (100.0)
男性冠詞合計	朝日	13 (19.7)	20 (30.3)	33 (50.0)	66 (100.0)
	毎日	19 (14.8)	22 (17.2)	87 (68.0)	128 (100.0)
	読売	4 (4.3)	25 (26.9)	64 (68.8)	93 (100.0)
	総 計	36 (12.5)	67 (23.3)	184 (64.1)	287 (100.0)

でいた。“男性”がかんむりにつく語も「社会系」が七九件、六三・二%と高い一方で、「政治・経済系」では一二件、九・六%しかなく、“女性”冠詞の場合と対照的である。これには、“硬い”記事において、男性は性別冠詞なしの「無徴」で表示され、女性も、“女性”冠詞によって「有徴の性」として表示されるということが影響していると推測されよう。

各紙での女性冠詞の使い方の違いをみると、読売の「生活・文化系」では、“女性”がかんむりとなる語が四五件、六六・二%と、他紙に比べて多かった。これは、生活面で「女性医師」の他、「女性歌手」「女性ボーカル」など芸能系の職業に就いている女性を多く取り上げていたためである。その分、読売では「政治・経済系」で“女性”冠詞が使用される頻度が二三・二%と少なくなっている。

男性冠詞については、朝日は他紙よりも使用頻度が低い、その中では、「政治・経済系」で、“男

性”がかんむりにつく語が八件、二七・六%と比率が高い、という特徴がみられた。また同紙においては、「生活・文化系」で、“男”冠詞の使用頻度が九件、五〇・〇%と、相対的に高かった。毎日、男性冠詞の使用頻度が合計一二八件と、三紙中最も高く、中でも、“男”がかんむりにつくことばが「社会系」で二八件、六二・二%、「政治・経済系」で一四件、三一・一%、“男子”がかんむりにつくことばが「生活・文化系」で二一件、三一・四%と、相対的に多く用いられていた。読売も「社会系」で“男子”の使用頻度が三四件、八七・二%と、相対的に多かった。

(4) 女性冠詞と男性冠詞の比較

女性冠詞が使われている表現には、男性冠詞と対^つになっているものと、そうでないものがある。対になっているものについて対照させたのが、表4である。この表では、女・男冠詞の対の合計が多い順に並べてある。“かんむり”は、“女”と“男”の対、“女子”と“男子”の対、“女性”と“男性”の対の三種類が記されているが、差が大きいのは“女”と“男”の対で、“女子”と“男子”の対および“女性”と“男性”の対についてはほとんど差がみとめられない。

この表に列挙した以外の冠詞表現は、すべて対をつくらない冠詞表現であり、それらは、ほとんどが女性冠詞であった。いい換えると、冠詞表現には、次のような使われ方の非対称性があるといえる。

一 “男性”あるいは“男子”がかんむりにつく語については、ほぼ確実に対となる女性冠詞“女性”ないし“女子”がつく語が存在し、その数は均衡している。

二 だが、「逆は真なり」というわけではなく、“女性”あるいは“女子”がかんむりにつく表現で、対となる

表 4 紙面ジャンル別にみた「女性冠詞」と「男性冠詞」の対の比較

(単位: 件)

女性冠詞 表 現	政治・ 経済系	生活・ 文化系	社会系	合 計	男性冠詞 表 現	政治・ 経済系	生活・ 文化系	社会系	合 計
女兒	20	17	105	142	男兒	16	12	35	63
女子生徒	9	1	18	28	男子生徒	2	5	60	67
女優	5	78	4	87	男優	0	4	0	4
女子学生	1	7	11	19	男子学生	1	10	4	15
女性会社員	1	6	7	14	男性会社員	0	2	10	12
女性教諭	1	3	2	6	男性教諭	1	1	11	13
女子児童	2	1	9	12	男子児童	2	0	2	4
女子高校生	1	6	7	14	男子高校生	0	1	0	1
女性記者	7	3	0	10	男性記者	0	1	0	1
女性社員	0	4	1	5	男性社員	1	2	0	3
女性客	0	3	0	3	男性客	0	3	1	4
女子中学生	0	3	2	5	男子中学生	0	0	2	2
女性患者	0	1	1	2	男性患者	1	1	3	5
女性正社員	1	0	0	1	男性正社員	5	0	0	5
女性従業員	0	0	1	1	男性従業員	0	1	2	3
女性職員	0	1	2	3	男性職員	0	0	1	1
女性美容師	0	0	1	1	男性美容師	0	0	3	3
女性運転手	0	1	1	2	男性運転手	0	1	1	2
女子大学生	0	0	1	1	男子大学生	0	1	1	2
女性歌手	0	2	0	2	男性歌手	1	0	0	1
女性上司	0	1	0	1	男性上司	0	1	0	1
女性看護師	0	0	1	1	男性薬剤師	0	1	0	1
女性編集者	0	1	0	1	男性編集者	0	1	0	1

「男性」冠詞ないし「男子」冠詞つ

きの語がないものが存在する。

後者に該当する語の中では、「女子高生」が計四〇件と多く、ジェンダーの偏りがよくあらわれた例となっている。また、「女性」というかんむりは、頻度が一〜三程度の語を薄く広く、多種類つくり出しており、造語力が旺盛だという点で、今後とも注意深く観察する必要があるだろう。

(5) 女性冠詞・男性冠詞のコレスポネンス分析

以下では、女性冠詞・男性冠詞が、新聞銘柄・紙面ジャンルとどのように関連しているかをみるために、コレスポネンス分析を行った結果を示す。

前述したように「臨時一語」は、一時

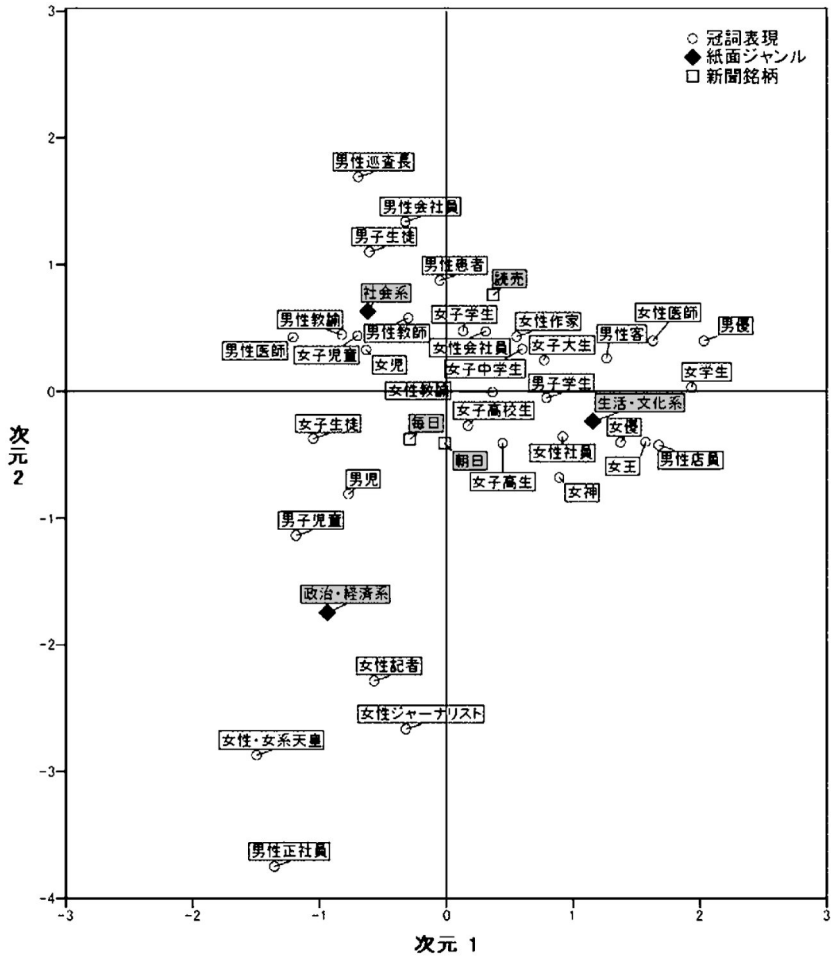
的にしか使われないため、この出現頻度は、ごく低いものとなる。このような低頻度な語は、対応分析では「はずれ値」となってしまうく扱えず、また、冠詞表現があまり多すぎても図示しきれないことから、頻度数が四以上の表現をデータとした。その結果がグラフ1である。グラフには、各冠詞表現、紙面ジャンル、新聞銘柄の位置づけがプロットされている。

紙面ジャンルの情報は、タテ軸である次元1とヨコ軸である次元2の両者によって説明される度合いが高く、グラフ1では原点の右側、すなわち、第1象限と第4象限に「生活・文化系」、左上の第2象限に「社会系」、左下の第3象限に「政治・経済系」が布置されている。冠詞表現についても、同様に二つの次元によって説明することができ、原点の左上である第2象限に男性冠詞群が比較的かたまっているのに対し、女性冠詞は右上の第1、右下の第4象限にかたまり、第3象限にも散らばっている。

紙面ジャンルと性別冠詞の関連性をみると、「生活・文化系」で「女優」「女王」「女性社員」「女性教諭」「女神」「女学生」「女子大生」「女子中学生」「女子高校生」「女子高校生」などが近い位置にプロットされており、女性冠詞とこの面が関連していることがわかる。一方、「社会系」では「女子児童」「女児」のほか、「男性教師」「男性教諭」「男性医師」「男性患者」「男子生徒」「男性会社員」などが近くにプロットされている。これは、調査時期にこういった人たちが事件・事故などで社会面に取り上げられていたためであり、読者に対してきこをセンセーショナルに伝えようとする性向のあるこの紙面ジャンルでは、男性にも冠詞がつけられる傾向が比較強いといえる。[政治・経済系]の面では、そばに布置された性別冠詞があまりなく、国際面などに掲載された「男児」「男子児童」や「女性記者」「女性ジャーナリスト」、総合・政治面などでみられた「女性天皇」が、原点からやや遠くにプロットされている。性別冠詞がこの面に集中していないということは、そもそもこの面では、女性の出現率が低

い一方、男性は、性別冠詞なしの「無徴」で表記されることが多いからである。

一方、新聞銘柄については、次元 2 によつて説明される度合いが高く、原点を中心に上方に読売が、下方に毎日と朝日が布置されている。三者の区別は必ずしも明白ではないが、読売では「社会系」で性別冠詞が使用される度合いが高く、朝日・毎日では



グラフ 1 女性冠詞・男子冠詞のコレスポネンス分析

「生活・文化系」や「政治・経済系」で利用率が高い傾向が示されている。性別冠詞との関係でみると、三紙とも女性冠詞群の近くに布置されているが、朝日・毎日では「生活文化系」に多い女性冠詞が、読売では「社会系」に多い男性冠詞が、近くにみられる。

また、グラフ1では、中心付近に女性冠詞が多く、男性冠詞がそれを遠巻きにしている傾向がみられる。これは、コレスポネンデンス分析では、頻度の多い表現は原点に寄る、という性質があるためであるが、女性冠詞と男性冠詞の不均等な関係がよく示されている。また、原点付近には、生徒・学生に関する語が、比較的よくまとまって配置されている。

2 ジェンダーを含み込んだ職業語

(1) クロス集計にみるジェンダーを含み込んだ職業語の傾向

性を含み込んだ職業語が、三紙のどの掲載紙面で使われていたかをまとめたのが表5、また、三紙の紙面ジャンルについてまとめたのが表6である。

まず三紙別にみると、表5にみるように毎日、男性の性を含み込んだ職業語が多いのに対し、読売、朝日では相対的に女性の性を含み込んだ職業語が多い。また、表6で紙面ジャンル別の傾向をみると、女性の性を含み込んだ職業語については、朝日は「生活・文化系」で、毎日と読売は「政治・経済系」で出現頻度が相対的に高く、男性の性を含み込んだ職業語では、朝日と毎日は「社会系」で、読売は「生活・文化系」で出現頻度が高い傾向がみられる。

新聞銘柄別にみたジェンダーを含み込んだ職業語の出現頻度

(単位: 件、() 内は%)

国際	経済	科学	教育	生活	文化・ メディア	地域	スポーツ	社会	合 計
1 (1.9)	2 (3.7)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (1.9)	30 (55.6)	3 (5.6)	0 (0.0)	2 (3.7)	54 (100.0)
2 (5.3)	2 (5.3)	1 (2.6)	0 (0.0)	5 (13.2)	5 (13.2)	1 (2.6)	1 (2.6)	11 (28.9)	38 (100.0)
6 (12.8)	1 (2.1)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (2.1)	28 (59.6)	1 (2.1)	0 (0.0)	0 (0.0)	47 (100.0)
3 (3.8)	3 (3.8)	0 (0.0)	0 (0.0)	10 (12.5)	24 (30.0)	0 (0.0)	10 (12.5)	23 (28.8)	80 (100.0)
1 (1.8)	1 (1.8)	0 (0.0)	2 (3.6)	4 (7.3)	13 (23.6)	3 (5.5)	2 (3.6)	10 (18.2)	55 (100.0)
0 (0.0)	2 (6.7)	0 (0.0)	3 (10.0)	5 (16.7)	9 (30.0)	0 (0.0)	7 (23.3)	2 (6.7)	30 (100.0)
8 (5.1)	4 (2.6)	0 (0.0)	2 (1.3)	6 (3.8)	71 (45.5)	7 (4.5)	2 (1.3)	12 (7.7)	156 (100.0)
5 (3.4)	7 (4.7)	1 (0.7)	3 (2.0)	20 (13.5)	38 (25.7)	1 (0.7)	18 (12.2)	36 (24.3)	148 (100.0)

具体的な職業語について、新聞銘柄と掲載紙面に分けて表 7 に示した。「のべ語数」(同一の語が何回も含まれていた場合、それぞれそれを一回と数えて総計した語数)は、性別でほとんど違くないが、「異なり語数」(同一の語が何度あらわれても、一回として数えた語数)では、女性の性を含み込んだ職業語は四五種類、男性のそれは三四種類で、女性の性を含み込んだ職業語の種類は、男性の一・三倍に達している。しかも、男性の性を含み込んだ職業語は、「〇〇マン」のように、語尾に「マン」をつけた

表 6 紙面ジャンル・新聞銘柄別にみたジェンダーを含み込んだ職業語の出現頻度

(単位: 件、() 内は%)

新聞	性別	政治・ 経済系	生活・ 文化系	社会系	合 計
朝日	女性	18 (33.3)	34 (63.0)	2 (3.7)	54 (100.0)
	男性	15 (39.5)	12 (31.6)	11 (28.9)	38 (100.0)
毎日	女性	17 (36.2)	30 (63.8)	0 (0.0)	47 (100.0)
	男性	13 (16.3)	44 (55.0)	23 (28.8)	80 (100.0)
読売	女性	21 (38.2)	24 (43.6)	10 (18.2)	55 (100.0)
	男性	4 (13.3)	24 (80.0)	2 (6.7)	30 (100.0)
総計	女性	56 (35.9)	88 (56.4)	12 (7.7)	156 (100.0)
	男性	32 (21.6)	80 (54.1)	36 (24.3)	148 (100.0)

構成の語が一五種類、出現頻度で男性合計の約四割（六四件）を占めており、表現の種類は少ない。それに比べると、女性のそれはかなり多い。様である。

新聞銘柄と紙面ジャンルとの関係については、次節のコレスポネンシス分析でみてゆきたい。

表5 掲載紙面・

新聞	性別	1面	総合・政治
朝日	女性	11 (20.4)	4 (7.4)
	男性	6 (15.8)	4 (10.5)
毎日	女性	0 (0.0)	10 (21.3)
	男性	2 (2.5)	5 (6.3)
読売	女性	6 (10.9)	13 (23.6)
	男性	2 (6.7)	0 (0.0)
総計	女性	17 (10.9)	27 (17.3)
	男性	10 (6.8)	9 (6.1)

表7 紙面ジャンル・新聞銘柄別にみた女性・男性の性を含み込んだ職業語

	職業語	朝日				毎日				読売				総計			
		政治・経済系	生活・文化系	社会系	合計	政治・経済系	生活・文化系	社会系	合計	政治・経済系	生活・文化系	社会系	合計	政治・経済系	生活・文化系	社会系	合計
女	従軍慰安婦	3	0	0	3	12	0	0	12	11	0	0	11	26	0	0	26
	ヒロイン	0	2	0	2	1	5	0	6	0	9	0	9	1	16	0	17
	OL	1	2	0	3	0	6	0	6	0	4	0	4	1	12	0	13
	看護婦	0	13	0	13	0	0	0	0	0	0	0	0	0	13	0	13
	代理母	0	0	0	0	0	0	0	0	5	0	6	11	5	0	6	11
	おかみ(さん)	8	0	0	8	0	1	0	1	0	0	0	0	8	1	0	9
	娼婦	0	1	0	1	0	3	0	3	0	0	0	0	0	4	0	4
	乳母	0	0	0	0	0	4	0	4	0	0	0	0	0	4	0	4
	ウェイトレス	0	0	0	0	1	2	0	3	0	0	0	0	1	2	0	3
	マドンナ	1	0	0	1	0	0	0	0	2	0	0	2	1	2	0	3
	ママさん医師	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	0	3	1	2	0	3
	慰安婦	0	0	0	0	2	0	0	2	1	0	0	1	3	0	0	3
	従軍看護婦	1	2	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	0	3
	遊女	0	3	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	3
	キャリアウーマン	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	1	1	0	1	1	2
	歌姫	0	1	0	1	0	1	0	1	0	0	0	0	0	2	0	2
	看板娘	0	1	0	1	0	0	0	0	1	0	1	0	2	0	0	2
	主婦パート	2	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	2
	修道女	0	1	0	1	0	0	0	0	0	1	0	1	0	2	0	2
	女将	0	1	0	1	0	0	0	0	0	1	0	1	0	2	0	2
	売春婦	0	0	0	0	1	1	0	2	0	0	0	0	1	1	0	2
	婦人	0	0	1	1	0	1	0	1	0	0	0	0	0	1	1	2
	保母	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2	0	0	0	2	2
	魔女	0	1	0	1	0	0	0	0	1	0	0	1	1	1	0	2
	イメージガール	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
	ギャル	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	1	0	1

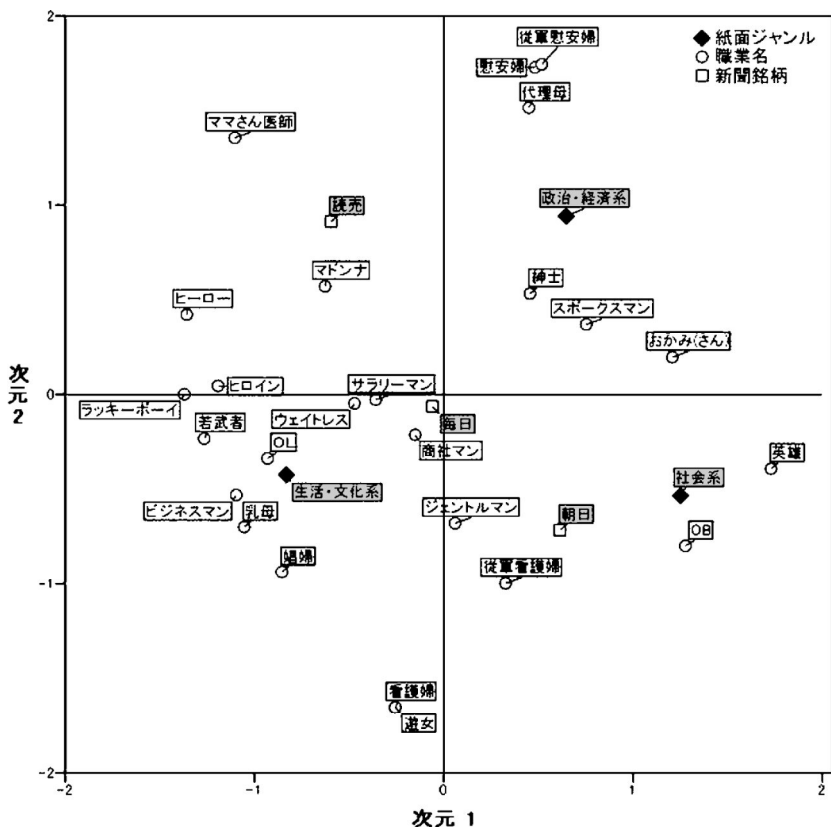
性	クラブママ	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
	ご婦人	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
	なでしこ火消し	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1
	ネオナチ・ガール	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1
	パート	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1
	パート社員	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	1	1	1	1
	バレリーナ	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	1
	ファースト・ナース	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	1	0	0	1	0	1
	ボンドガール	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	1	0	1	0	1
	会社員女性	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	1	0	1	1
	姑娘(クニヤン)巡査	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	1
	女流	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1
	女郎	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	1	0	1	0	1
	運炭婦	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	1
	店のママ	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	1
	尼さん	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	1	0	0	1	0	1
	婦長	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	1
	保育ママさん	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	1	0	1	0	1
	寮母	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1
合 計		18	34	2	54	17	30	0	47	21	24	10	55	56	88	12	156	
男	OB	7	5	9	21	1	0	18	19	0	1	2	3	8	6	29	43	
	サラリーマン	2	1	0	3	6	12	2	20	0	4	0	4	8	17	2	27	
	ヒーロー	0	0	0	0	0	4	0	4	1	8	0	9	1	12	0	13	
	ビジネスマン	0	1	0	1	0	8	0	8	0	2	0	2	0	11	0	11	
	スポーツマン	1	0	0	1	4	1	2	7	0	0	0	0	5	1	2	8	
	ラッキーボーイ	0	0	0	0	0	2	0	2	0	2	0	2	0	4	0	4	
	紳士	1	0	0	1	2	1	0	3	0	0	0	0	3	1	0	4	
	ジェントルマン	1	1	0	2	0	1	0	1	0	0	0	0	1	2	0	3	
	英雄	2	0	1	3	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	1	3	
	若武者	0	0	0	0	0	2	0	2	0	1	0	1	0	3	0	3	
	商社マン	1	1	0	2	0	0	0	0	0	1	0	1	1	2	0	3	
	カメラマン	0	1	0	1	0	1	0	1	0	0	0	0	0	2	0	2	
	ワンマン	0	0	0	0	0	1	1	2	0	0	0	0	0	1	1	2	
	神父	0	0	0	0	0	2	0	2	0	0	0	0	0	2	0	2	
	PR マン	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	1	0	1	
	イエスマン	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	1	0	1	
	オンブズマン	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	
	カウボーイ	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	1	0	1	
	キーマン	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	1	0	1	
	サムライ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	1	0	1	
	サラリーマン氏	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	1	0	1	
	スーパーマン	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	1	0	1	
	ソムリエ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	1	0	1	
	ボールボーイ	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	
	ボス	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	1	0	1	
	マエストロ	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	1	0	1	
	ルーキー	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	1	0	1	
	騎士	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	1	0	1	
	広告マン	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	1	0	1	
	広報マン	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	
	亭主	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	1	0	1	
	武者	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	1	0	0	1	
	武将	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	1	0	0	1	
	武人	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	1	0	0	1	
合 計		15	12	11	38	13	44	23	80	4	24	2	30	32	80	36	148	
性	OB	7	5	9	21	1	0	18	19	0	1	2	3	8	6	29	43	
	サラリーマン	2	1	0	3	6	12	2	20	0	4	0	4	8	17	2	27	
	ヒーロー	0	0	0	0	0	4	0	4	1	8	0	9	1	12	0	13	
	ビジネスマン	0	1	0	1	0	8	0	8	0	2	0	2	0	11	0	11	
	スポーツマン	1	0	0	1	4	1	2	7	0	0	0	0	5	1	2	8	
	ラッキーボーイ	0	0	0	0	0	2	0	2	0	2	0	2	0	4	0	4	
	紳士	1	0	0	1	2	1	0	3	0	0	0	0	3	1	0	4	
	ジェントルマン	1	1	0	2	0	1	0	1	0	0	0	0	1	2	0	3	
	英雄	2	0	1	3	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	1	3	
	若武者	0	0	0	0	0	2	0	2	0	1	0	1	0	3	0	3	
	商社マン	1	1	0	2	0	0	0	0	0	1	0	1	1	2	0	3	
	カメラマン	0	1	0	1	0	1	0	1	0	0	0	0	0	2	0	2	
	ワンマン	0	0	0	0	0	1	1	2	0	0	0	0	0	1	1	2	
	神父	0	0	0	0	0	2	0	2	0	0	0	0	0	2	0	2	
	PR マン	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	1	0	1	
	イエスマン	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	1	0	1	
	オンブズマン	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	
	カウボーイ	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	1	0	1	
	キーマン	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	1	0	1	
	サムライ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	1	0	1	
	サラリーマン氏	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	1	0	1	
	スーパーマン	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	1	0	1	
	ソムリエ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	1	0	1	
	ボールボーイ	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	
	ボス	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	1	0	1	
	マエストロ	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	1	0	1	
	ルーキー	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	1	0	1	
	騎士	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	1	0	1	
	広告マン	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	1	0	1	
	広報マン	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	
	亭主	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	1	0	1	
	武者	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	1	0	0	1	
	武将	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	1	0	0	1	
	武人	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	1	0	0	1	
合 計		15	12	11	38	13	44	23	80	4	24	2	30	32	80	36	148	

(2) コレスポネンダ分析にみる
ジェンダーを含み込んだ職業語
の傾向

紙面銘柄・紙面ジャンル・性を
含み込んだ職業語についてコレス
ポネンダ分析を行ったものがグ
ラフ2である。なお、職業語につ
いては、三件以上のものに限定
した。

職業語は、次元1と次元2によ
って、よく説明される結果となっ
た。紙面ジャンルと新聞銘柄につ
いても二つの次元と関係があるも
のの、相対的に紙面ジャンルは次
元1、新聞銘柄は次元2との関連
が強い。

グラフ2では、第1象限に「政
治・経済系」と関係の強い職業語



グラフ2 ジェンダーを含み込んだ職業語のコレスポネンダ分析

が布置されている。ここでは、「従軍慰安婦」と「慰安婦」は、ほぼ同一の位置にあり、同義で使われていたことがわかる。これは、国会等で「慰安婦問題」が狙上にのぼったためである。「おかみ(さん)」がこの領域に出現しているのは、奇異にみえるかもしれないが、一面で相撲部屋の「おかみ」が取り上げられていたためである。「スポークスマン」がここに布置されているのは、国際面などで海外動向が伝えられていたためであり、この紙面ジャンルの性格をあらわしている。「代理母」は、母親が娘夫婦の子を代理出産したスクープが影響している。

次に、第2象限には、読売新聞が布置され、その近くに「マドンナ」「ママさん医師」がみられる。

また、第3象限には「生活・文化系」、第4象限には「社会系」が布置されている。このうち、第3象限には、「遊女」「娼婦」「看護婦」といったものは現実の社会ではほとんど使われていない(あるいは改変されている)語がみられる。「若武者」は、スポーツ選手への比喩である。この第3象限には、「サラリーマン」「商社マン」「ビジネスマン」や「ウェイトレス」「OL」といった、都心の男性職およびそれと対称をなす都心の女性職のたまりもみられ、「生活・文化系」と近しいことがわかる。

一方、第4象限の「社会系」の近くには「OB」が布置されているが、これは、「天下り」に関する記事の掲載を反映したものである。また、この象限には朝日新聞がプロットされており、当紙において、第4象限にあらわれた語の使用率が高いことを示している。

全体の傾向としては、原点近くに男性職業語が多く、その周りに女性職業語が多い。これは、女性職業語では、低頻度の多様な

ことばの出現頻度
(単位：件、()内は%)

スポーツ	社会	合 計
5 (6.7)	18 (24.0)	75 (100.0)
1 (3.8)	12 (46.2)	26 (100.0)
3 (2.9)	34 (32.4)	105 (100.0)
0 (0.0)	19 (65.5)	29 (100.0)
3 (2.9)	27 (26.0)	104 (100.0)
2 (7.1)	11 (39.3)	28 (100.0)
11 (3.9)	79 (27.8)	284 (100.0)
3 (3.6)	42 (50.6)	83 (100.0)

表現が広く分布しているのに対し、男性職業語では、「OB」「サラリーマン」といった、反復して用いられる語の比率が高いことを反映している。

三つの新聞銘柄の布置関連をみてみると、朝日新聞は、原点をはさんで読売新聞と対極的な位置にあり、原点付近には毎日新聞が置かれるという位置関係となっている。

3 他者との関係で女性・男性があらわされることば

(1) クロス集計にみる傾向

他者との関係で女性・男性があらわされることばについて、新聞銘柄と掲載紙面とで、および新聞銘柄と紙面ジャンルとでクロス集計を行った結果が、表8と表9である。

他者との関係で女性をあらわすことばは、三紙とも「生活・文化系」で出現頻度が高く、中でも「文化・メディア」「生活」面での使用が目につく。一方、他者との関係で男性をあらわすことばについては、三紙とも「社会系」で出現頻度が高くなっている。ただし、読売では、それ以上に「生活・文化系」で多用され

表8 掲載紙面・新聞銘柄別にみた他者との関係で女性・男性をあらわす

新聞	性別	1面	総合・政治	国際	経済	科学	教育	生活	文化・メディア	地域
朝日	女性	2 (2.7)	18 (24.0)	7 (9.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	11 (14.7)	11 (14.7)	3 (4.0)
	男性	6 (23.1)	2 (7.7)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (7.7)	3 (11.5)	0 (0.0)
毎日	女性	2 (1.9)	14 (13.3)	10 (9.5)	2 (1.9)	0 (0.0)	0 (0.0)	17 (16.2)	18 (17.1)	5 (4.8)
	男性	1 (3.4)	2 (6.9)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	3 (10.3)	4 (13.8)	0 (0.0)
読売	女性	2 (1.9)	6 (5.8)	5 (4.8)	3 (2.9)	0 (0.0)	6 (5.8)	11 (10.6)	27 (26.0)	14 (13.5)
	男性	0 (0.0)	2 (7.1)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	3 (10.7)	0 (0.0)	9 (32.1)	1 (3.6)
総計	女性	6 (2.1)	38 (13.4)	22 (7.7)	5 (1.8)	0 (0.0)	6 (2.1)	39 (13.7)	56 (19.7)	22 (7.7)
	男性	7 (8.4)	6 (7.2)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	3 (3.6)	5 (6.0)	16 (19.3)	1 (1.2)

ており、特に「文化・メディア」面で使用が目立つ。

総合計数(延べ語数)で見ると、他者との関係で女性をあらわすことばは、男性のその三倍以上にのぼっている。

他者との関係で女性・男性をあらわす個々のことばを、新聞銘柄および紙面ジャンル別に、表10に示した。他者との関係で女性をあらわす語は、異なり語数において男性の約三倍と、多様性を示していることがよくわかる。新聞銘柄と紙面ジャンルとの関係については、コレスポネンス分析のところでまとめて述べたい。

表 9 紙面ジャンル・新聞銘柄別にみた他者との関係で女性・男性をあらわすことばの出現頻度

(単位：件、()内は%)

新聞	性別	政治・ 経済系	生活・ 文化系	社会系	合 計
朝日	女性	27 (36.0)	30 (40.0)	18 (24.0)	75 (100.0)
	男性	8 (30.8)	6 (23.1)	12 (46.2)	26 (100.0)
毎日	女性	28 (26.7)	43 (41.0)	34 (32.4)	105 (100.0)
	男性	3 (10.3)	7 (24.1)	19 (65.5)	29 (100.0)
読売	女性	16 (15.4)	61 (58.7)	27 (26.0)	104 (100.0)
	男性	2 (7.1)	15 (53.6)	11 (39.3)	28 (100.0)
総計	女性	71 (25.0)	134 (47.2)	79 (27.8)	284 (100.0)
	男性	13 (15.7)	28 (33.7)	42 (50.6)	83 (100.0)

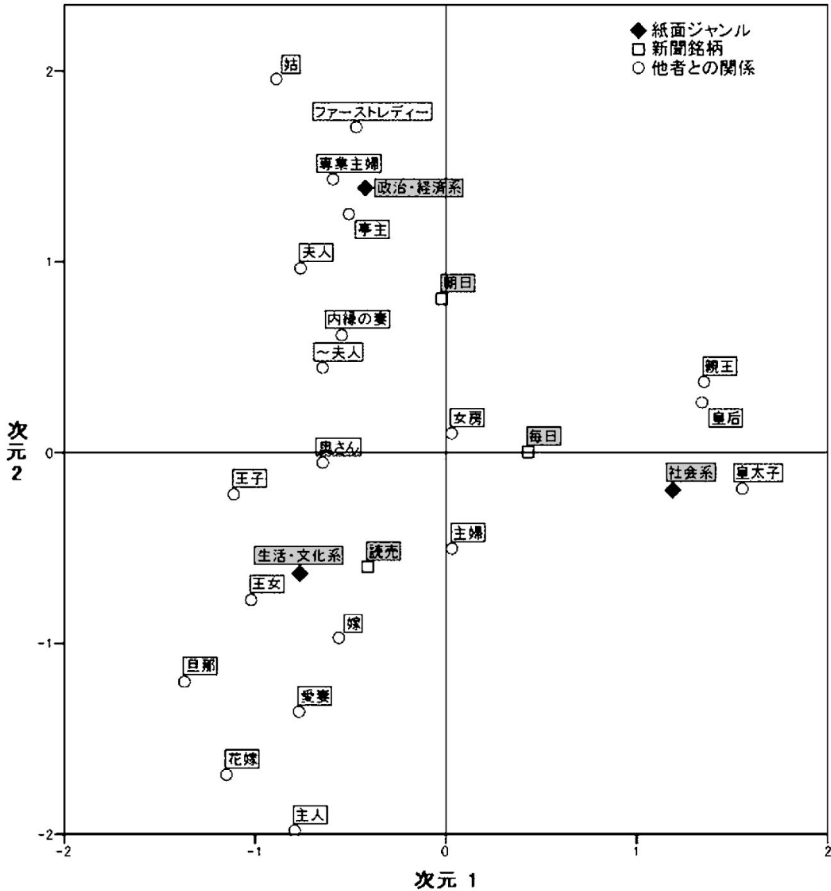
表10 紙面ジャンル・新聞銘柄別他者との関係で女性・男性をあらわすことば
(単位:件)

	他者との関係	朝 日				毎 日				読 売				総 計			
		政治・ 経済系	生活・ 文化系	社会系	合 計	政治・ 経済系	生活・ 文化系	社会系	合 計	政治・ 経済系	生活・ 文化系	社会系	合 計	政治・ 経済系	生活・ 文化系	社会系	合 計
女 性	主婦	7	8	9	24	6	15	21	42	0	31	11	42	13	54	41	108
	～夫人	2	3	0	5	10	0	0	10	6	9	5	20	18	12	5	35
	皇后	2	0	8	10	1	0	10	11	2	1	6	9	5	1	24	30
	奥さん	1	5	0	6	2	3	2	7	1	4	0	5	4	12	2	18
	姑	10	1	0	11	0	2	0	2	0	3	0	3	10	6	0	16
	夫人	1	2	0	3	3	2	0	5	2	1	0	3	6	5	0	11
	内縁の妻	1	3	0	4	0	0	0	2	0	2	0	4	3	3	2	8
	ファーストレディー	1	0	0	1	2	0	0	2	3	0	1	4	6	0	1	7
	嫁	0	0	0	0	1	2	1	4	0	3	0	3	1	5	1	7
	愛妻	0	0	0	0	0	4	0	4	0	1	0	1	0	5	0	5
	王女	0	0	0	0	1	1	0	2	0	2	0	2	1	3	0	4
	花嫁	0	0	0	0	0	2	0	2	0	2	0	2	0	4	0	4
	専業主婦	0	2	0	2	2	0	0	2	0	0	0	0	2	2	0	4
	女房	0	1	1	2	0	1	0	1	0	0	0	0	0	2	1	3
	シングルマザー	1	0	0	1	0	1	0	1	0	0	0	0	1	1	0	2
	愛人	0	0	0	0	0	2	0	2	0	0	0	0	0	2	0	2
	新妻	0	0	0	0	0	2	0	2	0	0	0	0	0	2	0	2
	姫	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	2	0	2	0	2
	令嬢	0	0	0	0	2	0	2	0	0	0	0	0	0	2	0	2
	～嬢	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	1	0	1
女 性	～天皇后	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	1	0	1
	～妃	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
	お姫さま	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	1
	かみさん	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
	まな娘	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
	家内	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
	寡婦	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	1	0	1
	古女房	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	1	0	1
	妾	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	1	0	1
	情婦	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
	新婦	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	1	1
	貞女	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
	内縁者	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	1	1
合 計		27	30	18	75	28	43	34	105	16	61	27	104	71	134	79	284
男 性	王子	0	1	11	12	1	0	13	14	0	2	9	11	1	3	33	37
	御曹司	3	2	1	6	0	1	0	1	0	7	0	7	3	10	1	14
	皇子	0	0	0	0	1	0	6	7	2	0	0	2	3	0	6	9
	皇太子	3	0	0	3	1	4	0	5	0	0	0	0	4	4	0	8
	主人	0	2	0	2	0	1	0	1	0	3	0	3	0	6	0	6
	新郎	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	1	3	0	2	1	3
	親王	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	1	1	0	1	1	2
	旦那	2	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	2
	亭主	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	1	0	1
	婿	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
	合 計	8	6	12	26	3	7	19	29	2	15	11	28	13	28	42	83

(2) コレスポンドンス分析

にみる傾向

新聞銘柄および紙面ジャンル、そして他者との関係で女性・男性があらわされることばについてコレスポンドンス分析を行ったものがグラフ 3 である。なお、他者との関係で女性・男性があらわされることばに関しては、使用頻度が三件以上のものに限定し、また、表記のゆれを統一した。「○○夫人」とあるのは、固有名詞に「夫人」がついたものである。「かみさん」は、「職業語」にも出ているが、ここでカウントした



グラフ 3 他者との関係で女性・男性をあらわす語のコレスポンドンス分析

のは妻の意味の用例である。

他者との関係をあらわすことばと紙面ジャンルは、次元1と次元2の両方に関連が深く、グラフの右側が「社会系」、上側が「政治・経済系」、下側に「生活・文化系」が布置されており、頻出語がそれらの領域と関連する形で配置されていることがわかる。たとえば、第2象限では、「政治・経済系」の周りに「ファーストレディー」「夫人」「○○夫人」などがみられるが、これは首相の妻である安倍昭恵ほか、「劉少奇氏夫人」「テキサス州知事夫人」など、政治家の妻がこの紙面ジャンルで扱われていたためである。また、「社会系」の近くには、「皇太子」「皇后」「親王」という皇族関係の語が布置されている。さらに、「生活・文化系」のそばには、「嫁」「愛妻」「花嫁」、また「奥さん」、それに「旦那」や「主人」がマッピングされている。

新聞銘柄についてはあまり判別力がなかったが、次元2との関係が強く、上方の「政治・経済系」に近いところに朝日、下方の「生活文化系」に近いところに読売、原点付近に毎日が配置されている。

4 「さん」と「氏」の使い分け

(1) クロス集計にみる傾向

最後に、「さん」と「氏」および「ちゃん」と「君」の四種類の敬称の使用頻度についてみてゆきたい。これらは、「接尾辞型敬称」と呼ばれ、敬称の中でも重要な位置を占めるものである。敬称は、日本語の敬語体系の一部であるが、社会的な諸条件によって使い分けられるという特徴がある。したがって、どのような敬称が用いられるか——ここでは特にどんな接尾型敬称が用いられるか——は、女性と男性に対する扱いの違いの指標となり得る。

同一記事内で一方の性が単一敬称で登場した場合について集計したのが、表11と表12である。三紙とも、「氏」は女性より男性につけられることが圧倒的に多く、また、「政治・経済系」で使われることが最も多いことがわかる。女性に対しては、「氏」よりも「さん」を用いる頻度が高く、この傾向は紙面ジャンルを問わず全紙面にみられる。

ここでは、紙面ジャンルによって、敬称の使い方に性別による違いがあるかを、表13によって検証してみよう。

まず、単純なものからみると、「ちゃん」と「君」の使用実態は、「政治・経済系」で少なく、「生活・文化系」と「社会系」で多い特徴をもっており、女性と男性に対する使い分けが明瞭にみて取れる分布となっている。これは、未成年の女子・男子への呼び方慣行から予想されるとおりである。新聞のような文字数の制約の強い媒体では、異なる敬称使用により性別表記を省略できることにメリットがあることは理解できるが、そもそも性別表記が不要であるという場合も多いのではないだろうか。

「さん」と「氏」については、「ちゃん」と「君」のような明瞭な相補的分布は読み取れなかったが、性別による使い分けの傾向はみられる。表13中に示されているように、「政治・経済系」領域の女性については、「さん」が「氏」の二・七倍使われているのに対し、男性の場合は〇・二倍（つまり「氏」が「さん」の四・六倍）と、逆の関係にある。この不均等関係は、「生活・文化系」と「社会系」という「ソフト」な記事領域では、さらに大きく広がっており、前者では女性が六五・〇倍に対し男性が二・二倍、後者では女性が一二九・〇倍に対し男性は四・一倍にとどまっている。

しかしながら、この比率には、新聞銘柄によって、違いがある。それを示したのが、表14である。読売では、

表11 掲載紙面・新聞銘柄別にみた敬称の出現頻度

(単位:件、()内は%)

敬 称	新 聞	性別	1面	総合・ 政治	国際	経済	科学	教育	生活	文化・メ ディア	地域	スポーツ	社会	総 計
氏	朝日	男性	112 (11.1)	390 (38.8)	201 (20.0)	73 (7.3)	1 (0.1)	0 (0.0)	0 (0.0)	87 (8.7)	10 (1.0)	64 (6.4)	67 (6.7)	1005 (100.0)
		女性	6 (18.2)	13 (39.4)	7 (21.2)	1 (3.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	4 (12.1)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (6.1)	33 (100.0)
	毎日	男性	61 (9.3)	202 (30.7)	221 (33.6)	35 (5.3)	3 (0.5)	0 (0.0)	2 (0.3)	49 (7.4)	10 (1.5)	45 (6.8)	30 (4.6)	658 (100.0)
		女性	4 (21.1)	5 (26.3)	9 (47.4)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (5.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	19 (100.0)
	読売	男性	54 (7.1)	349 (46.0)	113 (14.9)	51 (6.7)	0 (0.0)	28 (3.7)	1 (0.1)	73 (9.6)	13 (1.7)	40 (5.3)	36 (4.7)	758 (100.0)
		女性	3 (15.8)	11 (57.9)	2 (10.5)	1 (5.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (5.3)	1 (5.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	19 (100.0)
	「氏」合計	男性	227 (9.4)	941 (38.9)	535 (22.1)	159 (6.6)	4 (0.2)	28 (1.2)	3 (0.1)	209 (8.6)	33 (1.4)	149 (6.2)	133 (5.5)	2421 (100.0)
		女性	13 (18.3)	29 (40.8)	18 (25.4)	2 (2.8)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	6 (8.5)	1 (1.4)	0 (0.0)	2 (2.8)	71 (100.0)
さん	朝日	男性	45 (7.2)	68 (10.9)	36 (5.8)	23 (3.7)	20 (3.2)	4 (0.6)	56 (9.0)	121 (19.4)	60 (9.6)	26 (4.2)	164 (26.3)	623 (100.0)
		女性	2 (0.9)	13 (5.8)	41 (18.2)	9 (4.0)	2 (0.9)	0 (0.0)	36 (16.0)	29 (12.9)	22 (9.8)	2 (0.9)	69 (30.7)	225 (100.0)
	毎日	男性	32 (5.4)	83 (14.0)	22 (3.7)	8 (1.4)	4 (0.7)	3 (0.5)	33 (25.0)	148 (25.0)	63 (10.7)	9 (1.5)	186 (31.5)	591 (100.0)
		女性	8 (2.7)	22 (7.3)	24 (8.0)	13 (4.3)	0 (0.0)	2 (0.7)	45 (15.0)	59 (19.6)	39 (13.0)	11 (3.7)	78 (25.9)	301 (100.0)
	読売	男性	19 (2.8)	32 (4.7)	3 (0.4)	4 (0.6)	4 (0.6)	56 (8.2)	106 (15.6)	128 (18.8)	94 (13.8)	35 (5.1)	199 (29.3)	680 (100.0)
		女性	9 (2.5)	13 (3.7)	10 (2.8)	1 (0.3)	0 (0.0)	30 (8.5)	79 (22.3)	47 (13.3)	49 (13.8)	5 (1.4)	111 (31.4)	354 (100.0)
	「さん」合計	男性	96 (5.1)	183 (9.7)	61 (3.2)	35 (1.8)	28 (1.5)	63 (3.3)	195 (10.3)	397 (21.0)	217 (11.5)	70 (3.7)	549 (29.0)	1894 (100.0)
		女性	19 (2.2)	48 (5.8)	75 (8.5)	23 (2.6)	2 (0.2)	32 (3.6)	160 (18.2)	135 (15.3)	110 (12.5)	18 (2.0)	258 (29.3)	880 (100.0)
ちゃん	朝日	男性	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (33.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (33.3)	1 (33.3)	3 (100.0)
		女性	0 (0.0)	1 (4.2)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	7 (29.2)	5 (20.8)	5 (20.8)	2 (8.3)	4 (16.7)	24 (100.0)
	毎日	男性	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (20.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (20.0)	0 (0.0)	1 (20.0)	2 (40.0)	5 (100.0)
		女性	0 (0.0)	5 (11.9)	1 (2.4)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	9 (21.4)	0 (0.0)	0 (0.0)	27 (64.3)	42 (100.0)
	読売	男性	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (25.0)	1 (25.0)	2 (50.0)	4 (100.0)
		女性	1 (4.8)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (4.8)	2 (9.5)	4 (19.0)	0 (0.0)	4 (19.0)	9 (42.9)	21 (100.0)
	「ちゃん」 合計	男性	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (8.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (8.3)	1 (8.3)	1 (8.3)	3 (25.0)	5 (41.7)	12 (100.0)
		女性	0 (0.0)	1 (4.2)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	7 (29.2)	5 (20.8)	5 (20.8)	2 (8.3)	4 (16.7)	24 (100.0)
	毎日	男性	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (20.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (20.0)	0 (0.0)	1 (20.0)	2 (40.0)	5 (100.0)
		女性	0 (0.0)	5 (11.9)	1 (2.4)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	9 (21.4)	0 (0.0)	0 (0.0)	27 (64.3)	42 (100.0)
	読売	男性	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (25.0)	1 (25.0)	2 (50.0)	4 (100.0)
		女性	1 (4.8)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (4.8)	2 (9.5)	4 (19.0)	0 (0.0)	4 (19.0)	9 (42.9)	21 (100.0)
	「ちゃん」 合計	男性	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (8.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (8.3)	1 (8.3)	1 (8.3)	3 (25.0)	5 (41.7)	12 (100.0)
		女性	0 (0.0)	1 (4.2)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	7 (29.2)	5 (20.8)	5 (20.8)	2 (8.3)	4 (16.7)	24 (100.0)

		女性	1 (1.1)	6 (6.9)	1 (1.1)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (1.1)	9 (10.3)	18 (20.7)	5 (5.7)	6 (6.9)	40 (46.0)	87 (100.0)	
君	朝日	男性	1 (1.9)	5 (9.4)	1 (1.9)	0 (0.0)	0 (0.0)	5 (9.4)	7 (13.2)	6 (11.3)	14 (26.4)	1 (1.9)	13 (24.5)	53 (100.0)	
		女性	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	
	毎日	男性	0 (0.0)	4 (36.4)	5 (45.5)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (9.1)	1 (9.1)	0 (0.0)	0 (0.0)	11 (100.0)	
		女性	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	
	読売	男性	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (5.0)	0 (0.0)	5 (25.0)	2 (10.0)	9 (45.0)	3 (15.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	20 (100.0)	
		女性	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	
	「君」合計	男性	1 (1.2)	9 (10.7)	6 (7.1)	1 (1.2)	0 (0.0)	10 (11.9)	9 (10.7)	16 (19.0)	18 (21.4)	1 (1.2)	13 (15.5)	84 (100.0)	
		女性	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	
	氏とさん併用	朝日	男性	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
			女性	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
毎日		男性	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (100.0)	0 (0.0)	1 (100.0)	
		女性	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	
読売		男性	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	
		女性	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	
「氏」「さん」併用合計		男性	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (100.0)	0 (0.0)	1 (100.0)	
		女性	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	
あだ名+さん		朝日	男性	2 (11.1)	1 (5.6)	1 (5.6)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	6 (33.3)	1 (5.6)	5 (27.8)	2 (11.1)	18 (100.0)
			女性	0 (0.0)	1 (50.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (50.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (100.0)
	毎日	男性	2 (25.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	3 (37.5)	3 (37.5)	8 (100.0)	
		女性	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	3 (100.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	3 (100.0)	
	読売	男性	3 (11.1)	1 (3.7)	0 (0.0)	1 (3.7)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	11 (40.7)	6 (22.2)	5 (18.5)	27 (100.0)	
		女性	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (25.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	4 (50.0)	1 (12.5)	1 (12.5)	0 (0.0)	0 (0.0)	8 (100.0)	
	あだ名+「さん」合計	男性	7 (13.2)	2 (3.8)	1 (1.9)	1 (1.9)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	6 (11.3)	12 (22.6)	14 (26.4)	10 (18.9)	53 (100.0)	
		女性	0 (0.0)	1 (7.7)	0 (0.0)	2 (15.4)	0 (0.0)	0 (0.0)	4 (30.8)	4 (30.8)	2 (15.4)	0 (0.0)	0 (0.0)	13 (100.0)	

表12 紙面ジャンル・新聞銘柄別にみた敬称の出現頻度

(単位：件、()内は%)

敬 称	新聞	性別	政治・経済系	生活・文化系	社会系	総 計
氏	朝日	男性	777 (77.3)	161 (16.0)	67 (6.7)	1005 (100.0)
		女性	27 (81.8)	4 (12.1)	2 (6.1)	33 (100.0)
	毎日	男性	522 (79.3)	106 (16.1)	30 (4.6)	658 (100.0)
		女性	18 (94.7)	1 (5.3)	0 (0.0)	19 (100.0)
	読売	男性	567 (74.8)	155 (20.4)	36 (4.7)	758 (100.0)
		女性	17 (89.5)	2 (10.5)	0 (0.0)	19 (100.0)
	「氏」 合計	男性	1866 (77.1)	422 (17.4)	133 (5.5)	2421 (100.0)
		女性	62 (87.3)	7 (9.9)	2 (2.8)	71 (100.0)
さん	朝日	男性	192 (30.8)	267 (42.9)	164 (26.3)	623 (100.0)
		女性	67 (29.8)	89 (39.6)	69 (30.7)	225 (100.0)
	毎日	男性	149 (25.2)	256 (43.3)	186 (31.5)	591 (100.0)
		女性	67 (22.3)	156 (51.8)	78 (25.9)	301 (100.0)
	読売	男性	62 (9.1)	419 (61.6)	199 (29.3)	680 (100.0)
		女性	33 (9.3)	210 (59.3)	111 (31.4)	354 (100.0)
	「さん」 合計	男性	403 (21.3)	942 (49.7)	549 (29.0)	1894 (100.0)
		女性	167 (19.0)	455 (51.7)	258 (29.3)	880 (100.0)
ちゃん	朝日	男性	0 (0.0)	2 (66.7)	1 (33.3)	3 (100.0)
		女性	1 (4.2)	19 (79.2)	4 (16.7)	24 (100.0)
	毎日	男性	1 (20.0)	2 (40.0)	2 (40.0)	5 (100.0)
		女性	6 (14.3)	9 (21.4)	27 (64.3)	42 (100.0)
	読売	男性	0 (0.0)	2 (50.0)	2 (50.0)	4 (100.0)
		女性	1 (4.8)	11 (52.4)	9 (42.9)	21 (100.0)
	「ちゃん」 合計	男性	1 (8.3)	6 (50.0)	5 (41.7)	12 (100.0)

		女性	8 (9.2)	39 (44.8)	40 (46.0)	87 (100.0)
君	朝日	男性	7 (13.2)	33 (62.3)	13 (24.5)	53 (100.0)
		女性	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
	毎日	男性	9 (81.8)	2 (18.2)	0 (0.0)	11 (100.0)
		女性	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
	読売	男性	1 (5.0)	19 (95.0)	0 (0.0)	20 (100.0)
		女性	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
	「君」 合計	男性	17 (20.2)	54 (64.3)	13 (15.5)	84 (100.0)
		女性	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
氏とさん併用	朝日	男性	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
		女性	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
	毎日	男性	0 (0.0)	1 (100.0)	0 (0.0)	1 (100.0)
		女性	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
	読売	男性	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
		女性	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
	「氏」 「さん」 併用合 計	男性	0 (0.0)	1 (100.0)	0 (0.0)	1 (100.0)
		女性	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
あだ名＋さん	朝日	男性	4 (22.2)	12 (66.7)	2 (11.1)	18 (100.0)
		女性	1 (50.0)	1 (50.0)	0 (0.0)	2 (100.0)
	毎日	男性	2 (25.0)	3 (37.5)	3 (37.5)	8 (100.0)
		女性	0 (0.0)	3 (100.0)	0 (0.0)	3 (100.0)
	読売	男性	5 (18.5)	17 (63.0)	5 (18.5)	27 (100.0)
		女性	2 (25.0)	6 (75.0)	0 (0.0)	8 (100.0)
	あだ名＋ 「さん」 合計	男性	11 (20.8)	32 (60.4)	10 (18.9)	53 (100.0)
		女性	3 (23.1)	10 (76.9)	0 (0.0)	13 (100.0)

表13 紙面ジャンル・性別からみた敬称の使い分け

(単位:件、()内は%)

紙面ジャンル	性別	氏	女史	さん	さんと氏併用	ちゃん	君	あだ名+さん	合計	「さん」と「氏」の比
政治・経済系	女性	62 (25.8)	0 (0.0)	167 (69.6)	0 (0.0)	8 (3.3)	0 (0.0)	3 (1.3)	240 (100.0)	2.7
	男性	1866 (81.2)	0 (0.0)	403 (17.5)	0 (0.0)	1 (0.0)	17 (0.7)	11 (0.5)	2298 (100.0)	0.2
	小計	1928 (76.0)	0 (0.0)	570 (22.5)	0 (0.0)	9 (0.4)	17 (0.7)	14 (0.6)	2538 (100.0)	0.3
生活・文化系	女性	7 (1.4)	1 (0.2)	455 (88.9)	0 (0.0)	39 (7.6)	0 (0.0)	10 (2.0)	512 (100.0)	65.0
	男性	422 (29.0)	0 (0.0)	942 (64.7)	1 (0.1)	6 (0.4)	54 (3.7)	32 (2.2)	1457 (100.0)	2.2
	小計	429 (21.8)	1 (0.1)	1397 (70.9)	1 (0.1)	45 (2.3)	54 (2.7)	42 (2.1)	1969 (100.0)	3.3
社会系	女性	2 (0.7)	0 (0.0)	258 (86.0)	0 (0.0)	40 (13.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	300 (100.0)	129.0
	男性	133 (18.7)	0 (0.0)	549 (77.3)	0 (0.0)	5 (0.7)	13 (1.8)	10 (1.4)	710 (100.0)	4.1
	小計	135 (13.4)	0 (0.0)	807 (79.9)	0 (0.0)	45 (4.5)	13 (1.3)	10 (1.0)	1010 (100.0)	6.0
総 計		4984 (45.2)	2 (0.0)	5548 (50.3)	2 (0.0)	198 (1.8)	168 (1.5)	132 (1.2)	11034 (100.0)	1.1

表14 新聞銘柄・紙面ジャンル・性別からみた敬称の使い分け

(単位:件)

新聞	紙面ジャンル	性別	氏	女史	さん	さんと氏併用	ちゃん	君	あだ名+さん	合計	「さん」と「氏」の比
朝日	政治・経済系	女性	27	0	67	0	1	0	1	96	2.5
		男性	777	0	192	0	0	7	4	980	0.2
		小計	804	0	259	0	1	7	5	1076	0.3
	生活・文化系	女性	4	0	89	0	19	0	1	113	22.3
		男性	161	0	267	0	2	33	12	475	1.7
		小計	165	0	356	0	21	33	13	588	2.2
	社会系	女性	2	0	69	0	4	0	0	75	34.5
		男性	67	0	164	0	1	13	2	247	2.4
		小計	69	0	233	0	5	13	2	322	3.4
毎日	政治・経済系	女性	18	0	67	0	6	0	0	91	3.7
		男性	522	0	149	0	1	9	2	683	0.3
		小計	540	0	216	0	7	9	2	774	0.4
	生活・文化系	女性	1	1	156	0	9	0	3	170	156.0
		男性	106	0	256	1	2	2	3	370	2.4
		小計	107	1	412	1	11	2	6	540	3.9
	社会系	女性	0	0	78	0	27	0	0	105	—
		男性	30	0	186	0	2	0	3	221	6.2
		小計	30	0	264	0	29	0	3	326	8.8

読売	政治・経済系	女性	17	0	33	0	1	0	2	53	1.9
		男性	567	0	62	0	0	1	5	635	0.1
		小計	584	0	95	0	1	1	7	688	0.2
	生活・文化系	女性	2	0	210	0	11	0	6	229	105.0
		男性	155	0	419	0	2	19	17	612	2.7
		小計	157	0	629	0	13	19	23	841	4.0
	社会系	女性	0	0	111	0	9	0	0	120	—
		男性	36	0	199	0	2	0	5	242	5.5
		小計	36	0	310	0	11	0	5	362	8.6

「政治・経済系」での男性の「氏」づけが、「さん」づけの九・一倍とび抜けて多い。また、「生活・文化系」で女性への「さん」づけが「氏」の一〇〇倍を超え、性別により敬称を使い分ける傾向が強いことがみてとれる。毎日においても、「生活・文化系」で女性の「さん」づけが明瞭に出ている。朝日は、これらに比べると、紙面ジャンル別にみた敬称使用において、女性と男性の開きが小さいものの、性別による使い分けの傾向は同一方向にある。

(2) コレスポネンズ分析にみる傾向

敬称を「さん」と「氏」と「その他の敬称」に分け、性別・新聞銘柄・紙面ジャンルとの間でコレスポネンズ分析を行ったものがグラフ4である。

敬称については、次元1によってほとんど説明され、「さん」はグラフの左側、「氏」は右側にきれいに分かれる結果となった。「その他の敬称」については、次元2がかかわり、下部に位置している。新聞銘柄は、次元2によって説明されており、上方が毎日、下方が読売、原点付近が朝日という布置となっている。

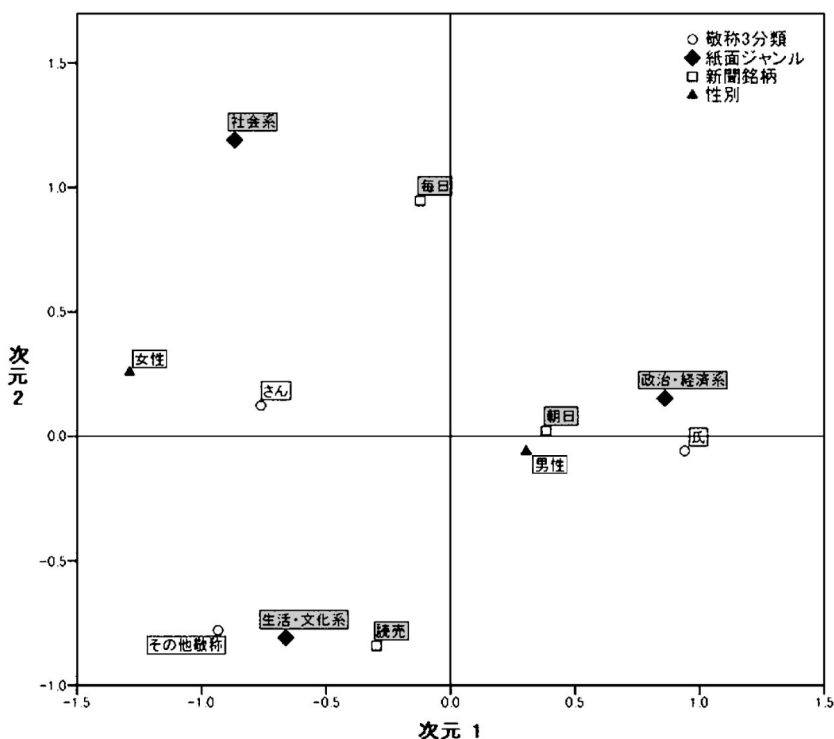
女性は「さん」と、男性は「氏」と、非常に関係が強く、連動している結果があらわれている。そして、紙面ジャンルがこれに関係し、「氏」は「政治・経済系」と関連し、「さん」は、「社会系」と関連が強いことがわかる。「その他の敬称」はグラフの下部の「生活文化系」に近い位置にある。新聞銘柄と紙面ジャンル、敬称の関係をみると、朝

日において男性の「氏」が「政治・経済系」の近くに布置されている点が目につく。

以上、本章では四種類のジェンダー表現が、新聞銘柄、掲載紙面、紙面ジャンル、性別とどのように関わっているかを、クロス集計とコレスポネンス分析を用いて分析した。

得られた結果をまとめると、まず、「政治・経済系」「生活・文化系」「社会系」という紙面ジャンルは、そこで用いられるジェンダー表現との関係が深いことがわかった。たとえば、女性冠詞は「生活・文化系」で使われる傾向が強くみられ、男性冠詞はどちらかというと「社会系」で使われる傾向が強い。

また、ジェンダーを含み込んだ職業語



グラフ 4 「さん」と「氏」の使用のコレスポネンス分析

は、「政治・経済系」で政治的なイッシューを反映した語が使われ、「生活・文化系」で「サラリーマン」や「OL」のようなジェンダーを含み込んだ会社員をさす語が使われる傾向がみられた。

他者との関係であらわされる語は、「政治・経済系」で政治家の妻が呼称される傾向が強く、「社会系」で男性の皇族が、「生活・文化系」で妻や夫を呼称する語が使われる傾向がみられ、それぞれジェンダーとの関連性が明らかとなった。

敬称については、「生活・文化系」および「社会系」の「ソフト」な紙面ジャンルで、女性には「さん」、男性には「氏」の使い分けが顕著にみられた。

一方、新聞銘柄については、紙面ジャンルに比べるとそれほど明瞭ではないものの、各銘柄により、傾向性の違いがみられた。

また、女性についてのジェンダー表現は、男性についてのものに比べ、出現頻度が高く、種類も多様である。性別冠詞の「女性」と「男性」のように対称性のある表現は、それだけを見るとジェンダー・バイアスがないようにみえるが、仔細に出現頻度・出現率を観察すると、紙面ジャンルによって、扱い方が対等ではなかった。また、女性に関するジェンダー表現は、前述した「造語力」という点では旺盛で、多種多様なジェンダーを表示する語を作り出し、新聞紙面のあちこちで女性を「有徴の性」として提示しつづけており、問題の根は深いといわざるをえない。

II 投書欄にみるジェンダー表現

1 投書欄の性質とジェンダー表現分析の意義

(1) 投書欄の歴史

新聞の投書欄は、記者が書く新聞記事や解説などと異なり、読者の手になる読者の意見が表明される紙面であり、その歴史は古い。

毎日新聞の前身である東京日日新聞は、一八七二年(明治五年)に創刊された、現存する最も古い日刊新聞であるが、一八七四年(明治七年)一月一〇日の社告によると、前年の六月から十二月までに寄せられた投書は一三〇〇通あまり、そのうちの三七四通が掲載されたという。⁽⁸⁾

同じく一八七四年(明治七年)、読売新聞二月二日創刊号の社告にも、「此の新ぶんは女童のおしへにとて為になる事柄を誰にでも分るやうに書いてだす趣旨でござりますから耳近い有益なことは文を談話のやうに認て御名まへ所がきをしるし投書を偏に願ひます。」と、読者に投書と呼びかけている。⁽⁹⁾

朝日新聞の場合、一九一六年(大正五年)一〇月二五日から「電汁」欄という記者が執筆する欄から始まり、同年一二月四日より「鉄箒」という欄に改題され、一九一七年(大正六年)から、時折読者からの投書載せるようになったという。現在の「声」欄は一九四五年(昭和二〇年)十一月一日から始まっている。⁽¹⁰⁾

女性専用の投書欄として知られる朝日の「ひととき」欄は、一九五一年(昭和二六年)一〇月、家庭欄が戦後復

活するとともに生まれた。当初は作家、評論家などが寄せる随想欄であったが、翌五二年一月から一般読者の投書も採用するようになり、四月下旬からは投書だけ載せるようになった。⁽¹¹⁾ 毎日の「女の気持」(七八年から「女の気持」)欄は、五四年三月一日、夕刊最終面で始まったとされ、当初は朝日と同じように女性の評論家らが執筆、読者からの投書を家庭面で掲載するようになったのは九月からだという。⁽¹²⁾

現在の生活・家庭面がいわゆる「婦人欄」「婦人面」として始まったことはつとに知られているが、川嶋保良によると、日刊紙で男女同権論、女性の就職、育児の心得、女性の参政権などの女性問題を連載するようになった佐賀新聞の一八八七年(明治二〇年)二月一日が、おそらく嚆矢なのではないかとのことである。⁽¹³⁾ カット入りの「欄」として掲載された起源は、大阪毎日新聞における一八九八年(明治三十一年)三月六日の「家庭の栞」欄で⁽¹⁴⁾あり、一面をまるまるあててようになったのは、一九一四年(大正三年)四月三日の読売「よみうり婦人附録」である。⁽¹⁵⁾「よみうり婦人附録」には、当初から「婦人の声」という投書欄があり、また同年五月二日からは「身の上相談」が始まっている。⁽¹⁶⁾

(2) 投書欄の性質と機能

投書欄には、次のようないくつかの性質や機能がある。

まず投書欄には、電車の中でみた「ちよっといいこと」、街中で体験した「腹立たしいできごと」などの体験エピソード、政治(家)への批判・提言、事件・事故に関する感想、記事への反響など、^{『森羅万象』}が載っている。第二に、投書欄の文章は、掲載されることを目的として書かれたものであり、読者の「素」のままの意識・主張とは限らないが、それらを反映している。

第三に、寄せられた投書を、投書担当以外の部署の人たちが読んでいるのか、また「社」としてこれらの投書にどれほど注目しているのかは定かではないが、新聞社にとって投書欄は、読者モニターの機能をも有しており、記事や社論づくりの一環として、役立てられていると推測される。

第四に、それとも重なるが、投書欄は、読者と新聞社とのコミュニケーションの場として機能している側面がある。テレビ局にも、膨大な電話やファックス、メールが寄せられるが、受け手の意見が毎日のようにマス・メディアに載る回路があるのは、編集部サイドでスクリーニングされているとはいえ、新聞ぐらいのものであるう。また、読者と新聞社のコミュニケーションだけでなく、投書をめぐって読者同士の紙上コミュニケーション(やりとり)が発生することが少なからずあり、読者間のフォーラム的な機能も果たしている。

第五に、前述のこととも関連して、投書欄は、読者にとって開かれた貴重なアクセス空間としての機能を有していることとみることができる。一部の雑誌やラジオ番組にも投稿のコーナーがあるものの、それらは、オーディエンスによるパブリック・アクセスが新聞ほど制度的に保証された空間とはいえない。テレビに関しては、欧米では、視聴者自らが番組枠を手に入れて、自らの主張を行うパブリック・アクセスがみられるが、日本ではそれへ向けた運動はあるものの、実際にはほとんど存在しない。また、インターネットの掲示板やブログに対する書き込みとも、大きく性質を異にしているのが新聞の投書欄である。

第六に、投書欄には第二にあげた読者の意識・主張が反映していることに加えて、その時代の雰囲気や思潮、社会意識が反映している。たとえば、見田宗介が行った「人生相談」の分析は、この点を解明した社会学的研究の白眉である⁽¹⁷⁾。

第七に、新聞社が正面切っていない部分を、投書が担っているという側面がある。新聞本紙は、一応、公正中

立を旨としているが、「社」の方向性や記者の主張が全く排除されているわけではなく、それらは社説や論説、署名記事などで目にするができる。投書欄は、それらの方向性や主張を、より一般化された「オピニオン」として、外部の読者に新聞社のいいたいことを代弁してもらう、あるいは補強してもらうという機能をも有している。現在、新聞のオピニオン面にあるいわゆる投書欄は、朝日「声」、毎日「みんなの広場」、読売「気流」である。

読者投稿には、こういった投書欄のほかに、朝日「私の視点」、毎日「発言席」(日曜日)のような「識者」や一般の人(「私の視点」のみ)が寄稿する批評・論文のコーナー、また朝日「朝日川柳」「かたえくぼ」、毎日「ふんすい塔」「万能川柳」、読売「よみうり時事川柳」「USO放送」などのような風刺・落首の応募コーナー、写真やイラストの投稿コーナー(投書欄のカットとして使われている)、各紙の歌壇・俳壇など文芸コーナー、さらに、いわゆる生活面・家庭面に掲載されている朝日「ひととき」「男のひととき」、毎日「女の気持ち」「男の気持ち」、読売「人生案内」「ぶらざ」「子どもの詩」などの投書欄、そしてテレビ・ラジオ面などに掲載される読者による番組批評の投稿や質問など、数多くの読者参加の企画がある。

中でも、生活面・家庭面での投書欄は、この欄をもとに社会運動が形づくられたり、女性問題に関する論争が起ったりなど、幅広い社会的展開の歴史がある。ビキニ環礁での米国の水爆実験により第五福龍丸が被曝した際に、朝日の「ひととき」欄に載った、乗組員の死を悼み、原水爆禁止を訴える投書から、一九五五年、平和運動の「草の実会」ができたことは有名である。また、毎日では「女の気持ちペングループ」が五六年に、読売では「赤でんわ」欄から「こだまの会」が五七年に、それぞれ投書者グループとしてできている。⁽¹⁸⁾

(3) 読まれている投書欄

本「新聞紙面にあらわれたジェンダー」調査研究においては、これまで投書欄やテレビ・ラジオ面、また小説、マンガ、広告などを集計から除外してきた。それは、これらが外部執筆者や外部組織による表現であり、新聞社の社員である記者が書き・編集する、新聞本紙の記事とは性格を異にする、という理由からであった。

しかしながら、朝日新聞社が二〇〇七年に行った調査⁽¹⁹⁾によると、「読者からの投書」は、二九・一%の閲読率で、四七種の記事分数中、一五番目に位置づく人気コーナーである。

そこで、第五回目にあたる〇六年一〇月一日から一五日までの調査においては、投書欄についても、のちにみるテレビ・ラジオ面とともに、そこで用いられているジェンダー表現を本紙と同一の基準・方法でカウントし、データ入力した。⁽²⁰⁾ここでは、一般投書面である朝日「声」、毎日「みんなの広場」、読売「気流」と、生活面・家庭面の朝日「ひととき」、毎日「女の気持ち」、読売「人生案内」「ぶらざ」などを中心とした、その他夕刊の投書をも含む投書欄の、ジェンダー表現に関する主なデータ、すなわち「性別冠詞」「性を含み込んだ職業語」「他者との関係で女男があらわされることば」「ステレオタイプ表現」について、収集したデータを元に分析を行う。なお、投書者の氏名は、本稿ではイニシャルで表現することとする。

2 読者が使用するジェンダー表現

(1) 性別冠詞の傾向

投書欄における、「女」「女性」「女子」「女流」がかんむりにつく女性冠詞および、「男」「男性」「男子」がかん

むりにつく男性冠詞は、グラフ 5 にみるように、朝日・毎日・読売の朝夕刊三紙合計で期間中に合計一九件使われていた。新聞本紙で使用されていた八八八件に比べれば、投書面・投書欄のスペースが各紙とも限られていることもあり、ごく微量である。女性冠詞は一二件、六三・二％に対して、男性冠詞は七件、三六・八％であった。本紙では女性冠詞が六七・七％、男性冠詞が三二・三％であったから、傾向的には本紙と似ているといえよう。

女性冠詞の内訳は、表 15 に示したように、「女兒」の五件を筆頭に、「女性社員」二件、「女子高生」二件が次が続いた。冠詞別にみると、「女」がかんむりにつくことばは「女兒」と「女優」で計六件、「女性」がかんむりにつくことばは「女性社員」「女性局員」「女性作家」で計四件、「女子」がかんむりにつくことばは「女子高生」のみで二件であった。「女流」は、使用されていなかった。

男性冠詞の内訳は、表 16 にみるように「男児」が最多の六件、「男子高校生」が一件であった。

これら「女兒」「男児」の語は、

朝日一日（以下、夕刊という記載がない場合はすべて朝刊）「声」欄の「ピンク男児服なぜ少ないの」という四一歳の「主婦」の投書において、「3 歳の長男はピンク色が大好きです。ところが、ピンクの男児服や靴はほとんど売っていません」「男児用品にも女兒同様、多様な色

表 15 女性冠詞の内訳

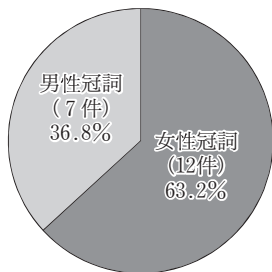
(単位：件)

順位	表 現	朝日	毎日	読売	合計
1	女兒	3	2	0	5
2	女性社員	0	2	0	2
	女子高生	0	1	1	2
4	女優	0	0	1	1
	女性局員	1	0	0	1
	女性作家	0	0	1	1
	合 計	4	5	3	12

表 16 男性冠詞の内訳

(単位：件)

順位	表 現	朝日	毎日	読売	合計
1	男児	5	1	0	6
2	男子高校生	0	0	1	1
	合 計	5	1	1	7



グラフ 5 投書欄における性別冠詞の女男比 (3 紙合計 19 件)

を作ってほしく思います」「ハートや花柄は女兒、車や恐竜は男児と決めつけるのはおかしく」などと、何箇所かで使われていたからである。この投書自体は、子どものファッションがジェンダーにとらわれないようにすべきと主張する内容のもので、併行して「女」「男」が冠詞をつけられたものといえる。

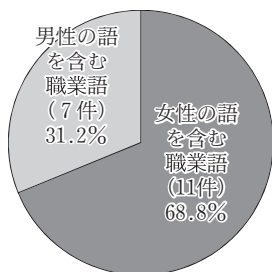
毎日で二件みられた「女兒」は、四日の生活家庭面の「子ども相談室」という読者からの相談コーナーで、「8カ月女兒」ということが使われていたことによる。

全体的にみれば、女性冠詞と男性冠詞の使用頻度に差があるものの、女性冠詞の単独使用、男性冠詞の単独使用の他に、女性冠詞と男性をあらわす無徴の語がセットで使われているダブルスタンダードなケース、この投書のように女性冠詞と男性冠詞が併行して使われるケースなど、単純集計だけではわからない部分があり、これらは本紙記事においても、今後の分析の課題であるといえよう。

(2) ジェンダーを含み込んだ職業語

性別を含み込んだ職業語の使用は、グラフ6に掲げたように三紙合計で一六件、女性の性を含み込んだ職業語が十一件、六八・八％に対して、男性の性を含み込んだ職業語は五件、三一・三％であった。本紙においては、ジェンダーを含み込んだ職業語の使用は合計二九七件であり、女性五〇・二％、男性四九・八％と、女男比はほぼ拮抗していたことからみれば、投書欄は女性の職業語が多く使われる度合いが強いといえそうである。

ただし、女性の性を含み込んだ職業語の内訳をみると、表17のように「婦



グラフ6 投書欄における性別を含み込んだ職業語の女男比(3紙合計16件)

表17 女性の性を含み込んだ職業語
(単位: 件)

順位	表 現	朝日	毎日	読売	合計
1	(ご)婦人	5	0	1	6
2	海女	0	0	2	2
3	パート女性	0	1	0	1
	パート	0	0	1	1
	代理母	0	0	1	1
	合 計	5	1	5	11

表18 男性の性を含み込んだ職業語
(単位: 件)

順位	表 現	朝日	毎日	読売	合計
1	神父	0	0	2	2
	サラリーマン	1	0	1	2
3	ビジネスマン	1	0	0	1
	合 計	2	0	3	5

人・ご婦人」が六件(朝日に多い)と、過半数を占めている。⁽²⁾ 本紙の記事でも、また、日常語としても、半ば「死語」となっている「(ご)婦人」が投書で使用されているところに、読者の年代や言語感覚があらわれているようだ。事実、「婦人」の語は、朝日一日「声」欄の「心締め付ける婦人らの悲鳴」で、敗戦時の武装解除後に出会った女性たちのことを書いた八一歳の無職男性による投書において四箇所が使われていた。「海女」の二件は、読売一二日の「気流」欄で、八〇歳の農業従事者の男性の投書で使われている。

男性の性を含み込んだ職業語は、表18のように「神父」二件、「サラリーマン」が二件みられた。「サラリーマン」は、一つは曖昧な用法であり、もう一つは職業の代表として使われているものであった。

(3) 他者との関係であらわされることば

投書欄における他者との関係であらわされることばは、合計で一二六件カウントされた。そのうち女性が家族や男性との関係であらわされることばは、グラフ7にみるように、一一八件、九三・七%、男性が家族や女性との関係であらわされることばは八件、六・三%であった。

本紙では、他者との関係であらわされることばは合計三七〇件みられ、そのうち女性が他者との関係であらわされることばは七七・六%、男性が他者との関係であらわされることばは二二・四%であったから、投書欄の方が、

女性が他者との関係であらわされる度合いは高い。女性について、家族や夫などとの関係であらわすことが、読者の生活世界では、より日常的に使われているためかもしれない。内訳をみると、表19に示したように「主婦」の九一件を最多に、「嫁・お嫁さん」一〇件、「奥さん」五件、「女房」四件などが続いている。

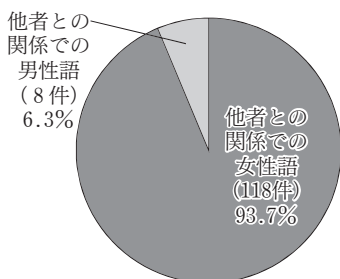
「主婦」は、各紙ともほとんどが投書者の肩書きとして使われている。読売一四日「気流」欄の「代理出産の子供 法解釈配慮必要」に「主婦 S・A 28 (長野県上田市)」、「野球人気回復へ 巨人の奮起期待」に「主婦 N・R 56 (三重県東員町)」、毎日七日「女の気持ち」欄での「息子の新米」に「茨城県土浦市 S・U 主婦・49歳」といった按配である。本紙における「主婦」の使用は、三紙合計で一〇八件あったが、それに対する九一件は、本紙並みの使用量といえ、投書する無職の女性たちの「肩書き」として定着していることがうかがえる。

「嫁」は、読売七日の「人生案内」欄が数を押し上げており、「(秋田・K子)」による「孫が暴言、注意したら嫁反発」という題の相談で四箇所、映画監督の大森一樹の回答で三箇所、ほかにも「姑」ということが使われている。「奥さん」も読売三日の「人生案内」で、「20代主婦」という相談者によって二箇所、回答者である作家の立松和平によって一箇所が使われている。

また「女房」に関しては、毎日八日

表19 他者との関係で女性があらわされることば

		(単位:件)			
順位	表 現	朝日	毎日	読売	合計
1	主婦	28	21	42	91
2	嫁・お嫁さん	0	0	10	10
3	女房	0	4	0	4
4	奥さん	1	0	4	5
5	家事手伝い	0	0	2	2
6	お姫様	1	0	0	1
	秋篠宮妃	0	1	0	1
	姑	0	0	1	1
	転勤族の妻	0	0	1	1
	お嬢様	0	0	1	1
	ママ族	0	1	0	1
合 計		30	27	61	118



グラフ1 投書欄における他者との関係であらわされる語の女男比 (3紙合計126件)

表20 他者との関係で男性があらわされることば

(単位: 件)

順位	表 現	朝日	毎日	読売	合計
1	親王・親王さま	0	0	4	
2	婿養子	0	0	2	2
3	内親王	0	0	1	1
	王子	0	0	1	1
	合 計	0	0	8	8

「みんなの広場」欄で、六六歳の無職男性が「作って褒められ 楽しい料理」というタイプの投書を行った際に、「定年退職を機会に女房の勧めもあつて始めた料理」という文章をはじめとして、合計四件使用されていた。

男性が家族や女性との関係であらわされることばは、表20に示したように、「親王・親王さま」の四件、「婿養子」二件などで、合計八件みられた。「親王」などの語が多かったのは、読売一〇月一日の「気流」欄が載っている投書面に、「9月の読者相談」という「読者センター」発信のコナーが、前月九月六日の秋篠宮紀子が男の子を出産したことにともない、読者からの「親王」に関する問い合わせ・意見が寄せられたことを報告したのが原因している。また、「婿養子」の語は、読売一日の「人生案内」欄での、「70代の主婦」による「夫は私の財産目当てだった?」という相談と作家・久田恵の回答の中で、使われていた。

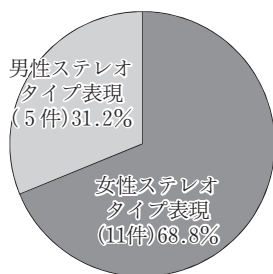
(4) 投書欄におけるステレオタイプ表現

投書欄におけるジェンダー・ステレオタイプ表現は、グラフ8に示したように、合計一六件みられ、女性に関するステレオタイプ表現が一件、六八・八%、男性に関するステレオタイプ表現が五件、三一・三%となった。多い数ではないが、グラフ9にみるように、女性に関するステレオタイプは、「心理、行動、役割など」に関するステレオタイプ表現が特化して六件みられ、次いで「容姿、服装、年齢など」外見に関するものが二件みられる。一方、男性に関するステレオタイプは、「容姿、服装、年齢など」外見に関するものが多く、三件みられた。

女性の心理、行動、役割などに関するステレオタイプ表現としては、たとえば毎日一日の「女の気持ち」欄で、

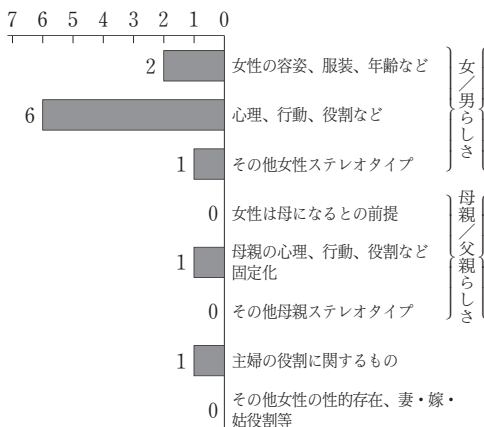
女性の容姿、服装、外見に関するステレオタイプ表現としては、朝日二日「ひととき」欄での、四七歳の「総菜店勤務」の女性が綴る、かつての自分(投書者の女性)の

七一歳の「主婦」が「花も嵐も」という題で寄せた『可愛い子供は女の生命(いのち) なぜに淋しい子守唄』との歌詞は、女性なら胸に染み込む」といった記述があげられる。また、この歌詞は、母親の心理に関するステレオタイプでもある。読売二日のくらし面における投書欄「ぷらざ」には、「東京都板橋区 Y・T 66」という女性が、「今の若い女性」は、電車の中で化粧をすることが多いので、人目を気にしないものとはわかっていたが、ジーンズの穴から下着が見えても平気だとは…」という、女性の心理や行動を決めつけるかのような文章を寄せている。

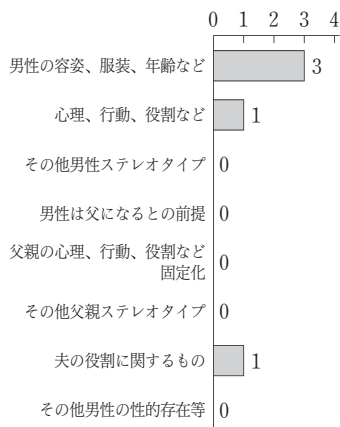


グラフ8 投書欄におけるステレオタイプ表現の男女比(3紙合計16件)

女性のステレオタイプ表現
(3紙合計11件) (単位: 件)



男性のステレオタイプ表現
(3紙合計5件) (単位: 件)



グラフ9 投書欄における性別ステレオタイプ表現の内訳

写真について夫から「美人だね」といわれ、このところ忙しくて写真のように笑っていないことに気づき、「今日からきれいになる努力をしてみよう」と決意する投稿や、読売一日「人生案内」欄の「(茨城・T子)」による「夫は私の財産目当てだった?」という投書の「美人でもない私の婿養子に來たのではないかと思う」という記述などがあげられる。

男性に関しては、読売、三日「人生案内」欄の、「(千葉・O子)」による「夫の先輩と『再会』心揺れる」というタイトルの、「思いがけず彼(かつて交際を断った夫の先輩)が現れ、相変わらずの男性的な魅力と、申し分のない家庭人ぶりに、自分の決断を悔やみました」といった文章に、男性の容姿、服装、年齢など外見に関するステレオタイプと夫役割に関するステレオタイプを読み取ることができる。

このように、投書欄は、ジェンダー表現の数こそ少ないながら、読者のジェンダー観やジェンダーに関する言語感覚が比較の出やすい傾向がみられるように感じられる。読者との回路をつくり、読者の声をすくい上げることはもとより重要であるが、この回路が読者のジェンダー観やジェンダー言語を無自覚・無批判に拡大再生産してしまう恐れがないとはいえない。新聞が本紙において、ジェンダーにとらわれないことばを使うように心がけており、ジェンダーにとらわれないことばを、日常語として普及してゆく機能を少なからず担っているとすれば、投書欄に關しても、読者の言語空間を巻き込んでいく仕掛けが、新聞社サイドにあってもいいのかもしれない。⁽²²⁾

III テレビ面・ラジオ面にみるジェンダー表現

1 テレビ面・ラジオ面の性質とジェンダー表現分析の意義

(1) 最もよく読まれているテレビ・ラジオ面

本調査研究では、テレビ面およびラジオ面の表現についても、投書欄と同じく、新聞社が直接タッチする記事ではないという理由から、これまでカウント対象から除外してきたが、今回は別集計ができるように、カウント作業を行った。

日本新聞協会が二〇〇七年に行った調査によると、⁽²³⁾「テレビ・ラジオ番組表」の閲読率は八〇・六%(女性八六・六%、男性七四・〇%)の高きに達し、全記事ジャンル中第一位である。また、朝日新聞社が〇七年に行った調査⁽²⁴⁾においても、「テレビ・ラジオ欄」は七〇・一%の閲読率で、第一位の「事件・事故」七〇・三%とほとんど変わらない高閲読率である。テレビ・ラジオ面がなければ、新聞の定期購読率はきめんに下がっていたであろうといわれるほど、この面は新聞にとって重要な「商品」として位置づけられてきた。それほど読者にとっては日常化した紙面である。

そうであればなおさら、改めてそのジェンダー表現について着目することは、意義のあることだといえるだろう。

(2) テレビ・ラジオ面の歴史と現状

一九二五年(大正一四年)にラジオ放送が始まり、それに合わせて読売新聞は、同年一月一日に「よみうりラヂオ版」を創設、大いに販売部数を伸ばしたといわれる。その後各新聞社は、紙面にラジオ欄を設けるようになる。そして戦後の一九五七年から、NHKおよび民間放送局の日本テレビによるテレビ本放送が開始されるとともに、テレビ欄が創設されて、「ラジオ欄・テレビ欄」と総称(「ラテ欄」などと略称)されるようになった。やがて六〇年代には、地上波VHFテレビ局の数も増え、七〇年代にはUHF局、八〇年代以降は衛星放送(BS)、通信放送(CS)などが加わって、放送形態の多様化にともなう多チャンネル化し、番組プログラム数も格段に増えた。また、ラジオ局も中波局・短波局に加えて、七〇年代以降、FM局が開設されるようになる。それにとまって、テレビ面、ラジオ面が独立し、それぞれが一面をまるまる使うようになった。このような経緯を経て、今や主要な新聞には、朝夕刊に連日掲載されるテレビ・ラジオ面だけでなく、その週のプログラムや番組案内を載せる面が、週一回ペースで見られるようになっていく。

現在、テレビ面およびラジオ面は、専門のテレビ・ラジオ番組表配信会社「東京ニュース通信社」と「日刊編集センター」が制作し、各紙に配信している。東京ニュース通信社は、毎日、読売、日経などにテレビ・ラジオ面の情報を配信している。一方、日刊編集センターは日刊スポーツの編集・制作を行う朝日新聞系列の会社である。このような共同配信システムにより、番組表の表現に関しては各紙ごとの違いはほとんどみられない。ただし、番組表下の番組紹介欄や解説欄(朝日「試写室」「ウォッチ」、毎日「視聴室」、読売「試写室」など)で取り上げる番組や記述内容は、各紙それぞれ異なっている。

テレビ番組表は、番組タイトルが掲げられるだけでなく、その内容を短縮した説明調の文章が記されるようにな

り、長文化、センセーショナル化する傾向がみられる。それは、より高い視聴率を取りたいために、「煽り文句」が多用されるからであろう。

朝日の場合、本調査を開始した一九八五年一〇月朝刊のテレビ面スペースは、全一五段中七段分を占めていたが、第五回調査の二〇〇六年一〇月朝刊のテレビ面は、全一五段のうち、地上波放送の番組案内が九段分へと、スペースが増えている。これは、この間に文字サイズが大きくなったぶん、字詰めが減って行数が増えたためもあるが、テレビの一番組あたりの時間枠がワイド化し、説明書きがより増えたためでもあると思われる。たとえば、八五年一〇月一日朝刊番組表に掲載されたフジテレビ夕方六時から七時のニュース番組「スーパータイム」の説明文は、「三浦和義追及ギリギリの大詰め▽新体操男版▽ワイン騒動地元ルポ」の二八文字(▽記号除く)であった。ところが、〇六年一〇月二日朝刊に掲載されているフジテレビ夕方四時五十分から七時までの「スーパーニュース」の説明文は、「安倍新首相が国会論戦▽兵庫国体に斎藤旋風▽子連れママの再出発／＼年の差」結婚新時代／夫は14歳年下イケメン／家事と育児：日々献身／突然の病：試される絆▽ディープ運命の決戦／世界一の夢」(／印は改行の意)と、時間枠の延びにもなつて行数も増え、八二文字(▽記号除く)となっている。

それにしても、「子連れママの再出発」の「煽り」は、「子連れママ」「年の差」「14歳年下」「イケメン」「日々献身」「突然の病」「試される絆」など、ほぼ全ての語句が「彼女の不幸」を表象しているとともに、「不幸の物語」を構成しており、読者・視聴者は、この「ドラマ」(番組はニュースだが)をどうしてもみたいという気にさせられる。

ここでは、三紙朝夕刊におけるテレビ・ラジオ面のジェンダー表現に関して、「性別冠詞」「性を含み込んだ職業語」「他者との関係で女男があらわされることば」「ステレオタイプ表現」、そして「意識的に人名を下の名で呼ぶ

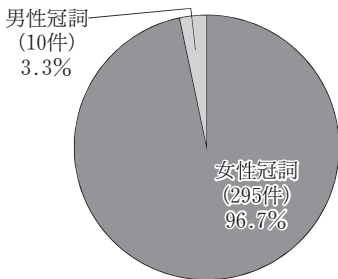
表現」の集計結果について紹介するとともに、分析を試みる。番組表現を例示する際には、内容をあらわす表現（カウントした表現）を最初に示し、そのあとカッコ内に番組名、放送局名、掲載日の順で表示する。

2 テレビ・ラジオが好むジェンダー表現

(1) 性別冠詞の傾向

最初に、テレビ・ラジオ面の性別冠詞をみると、グラフ10に示したように三紙朝夕刊合計で三〇五件、うち女性冠詞が大多数の二九五件、九六・七％を占め、男性冠詞は一〇件、三・三％という数値となった。新聞本紙の女性冠詞六七・七％、男性冠詞三二・三％に比べると、極端に女性冠詞に偏っており、この面がいかにジェンダー・バイアスのかかった表現をしているかの一端が垣間みえる。

次に、女性冠詞の分布をみると、「女」がかんむりにつくことが最多で一八八件、女性冠詞のうち六三・七％、次いで「女子」六七件、同二二・七％、「女性」三五件、同一・九％、そして「女流」五件、同一・七％であった。本紙の女性冠詞（合計六〇一件）の分布は、それぞれ四六・三％、二四・八％、二八・一％、〇・八％であったから、テレビ・ラジオ面においては、「女」がつく語が一七ポイント高く、「女性」のつく語が一六ポイント低い。テレビ・ラジオ面では、「女」という他の女性冠詞よりもやや生なましいかんむりをつけたことが多く用いられ、より女性が強調されているといえよう。



グラフ10 テレビ・ラジオ面における性別冠詞の女男比（3紙合計305件）

“女”がかんむりにつくことばで最も多かったものは、表21にみるように、テレビ・ラジオ面が芸能人を扱った紙面であることを反映した「女優」の七八件で、“女”冠詞の四割を占めている。たとえば「大物女優と深夜密会ドライブ」(「ザ・ワイド」日本テレビ、二日)、「朝ドラ女優VS芸人連合VS女子アナ」(「ロンドンハーツ2006秋民放各局完全同時中継」テレビ朝日、三日)、「有名女優が九死に一生」(「衝撃スクープ裏のウラ」日本テレビ、七日)といった具合である。以下「女兒」三〇件、「女医」一九件、「女王」一五件などが続いた。二位の「女兒」は、「小6女兒自殺で市教委が隠ぺい疑惑に反論」(「とくダネ!」フジテレビ、三日)、「小6女兒自殺はいじめ原因と一転認め市長ら遺族に謝罪」(「みのもんたの朝ズバツ!」TBS、六日)などのように、本紙でも多く扱われていた小学生女子のいじめによる自殺に関するものが中心で、このほかには、他の女の子の殺人事件を報じる番組で使われていた。また、「美女医が警告 犬に寄生虫」(「ラジかるッ」日本テレビ、三日)、「自分の死体を解剖した女医!」(「法医学教室の事件ファイル」テレビ朝日、七日)などのように、テレビ番組は「女医」も“好き”なようである。

“女性”がかんむりにつくことばは、表22に示したように、「女性刑事」九件が最多で、「美人女性刑事コンビが覆面パトカー」(「踊る!大警察24時」フジテレビ、一日)、「女性刑事あの未解決事件に挑む」(「Jチャン」テレビ朝日、一五日)などのタイトルがみられた。

“女子”がかんむりにつくことばは、表23にみるように、

表21 女性冠詞“女”のつくことば
(単位:件)

順位	表 現	合計
1	女優	78
2	女兒	30
3	女医	19
4	女王	15
5	女社長	11
6	女帝	7
7	女神	5
	女弁護士	5
9	女格闘家	4
10	女スパイ	3
11	女テロリスト	2
	女戦士	2
	女主人	2
14	女芸人	1
	女警察署長	1
	女学生	1
	女店主	1
	女官長	1
	合 計	188

表22 女性冠詞「女性」のつくことば
(単位: 件)

順位	表 現	合計
1	女性刑事	9
2	女性記者	3
	女性タレント	3
4	女性アーティスト	2
	女性歌手	2
	女性上司	2
7	女性アクロバット芸人	1
	女性医師	1
	女性格闘家	1
	女性患者	1
	女性曲芸師	1
	女性校長	1
	女性仕掛け人	1
	女性社長	1
	女性トップアスリート	1
	女性マネジャー	1
	女性レゲエシンガー	1
	女性アナウンサー	1
	女性シンガー	1
	女性捜査官	1
合 計		35

表23 女性冠詞「女子」のつくことば
(単位: 件)

順位	表 現	合計
1	女子アナ	33
2	女子高生	14
3	女子大生	11
4	女子軍団	3
5	女子アナウンサー	2
6	女子高校生	1
	女子生徒	1
	女子中学生	1
	女子マネ	1
合 計		67

その半数を「女子アナ」(二三件)が占めている。その表現たるやすきまじく、「全国の女子アナVS細木：強烈ダメ出し連発で号泣者が続出」(ズバリ言うわよ!)TBS、三日、「全国女子アナVS

南キャン赤っ恥対決」(「超豪華オールスターハブニング大賞2006秋」TBS、六日)、「女子アナの結婚したい大物は…」(「ジャンクSPORT夢の超大物アスリート豪傑伝説スペシャル!」フジテレビ、八日)のように、全くタレント扱いである。これらの事例の多くは、一〇月という番組編成替えの時節柄、レギュラーの番組ではなく、時間枠を延ばした特別編成の「スペシャルもの」で目立っている。「女子アナ」という業界独特の略称はすっかり定着し、九〇年代からの「女子アナブーム」は、二一世紀に入っても衰えることがない。テレビ局は「女子アナ」を売りものにし、番組も「女子アナ」で視聴率を獲得しようとしているのである。

なお、「女子アナウンサー」という略さない表現も二件みられ、これを足せば「女子〇〇」の半数を超える。これに対し、後述するように「男子アナ」「男子アナウンサー」は皆無、また「男性アナ」「男性アナウンサー」もみられなかった(「女性アナウンサー」は一件みられる)。

表24 女性冠詞「女流」のつくことば
(単位:件)

順位	表 現	合計
1	女流作家	3
2	女流棋士	1
	女流初段	1
合 計		5

表25 男性冠詞がつくことばの内訳
(単位:件)

順位	表 現	合計
1	男児	3
2	男性コーラスグループ	2
	男性社員	2
4	男性ピアノ弾き語りアーティスト	1
4	男子モデル部員	1
	男子高校生	1
合 計		10

*順位は男性冠詞全体のもの

以下、「女子高生ドライバーの『飲酒事故』はなぜ罪に問われなかったのか」(「Jチャンネル」テレビ朝日、一二日)、「女子高生組長誕生!!」(「セーラー服と機関銃」TBS、一三日)など「女子高生」一四件、「女子大生と前座落語家」(NHK「一期一会」一三日)など、「女子大生」一一件が続くが、これらは本紙にも登場件数の多いものである。どうやらテレビ・新聞ともマス・メディアは、女性の若さと性を表象したこれらのキャラクターが「好き」なようで、作り手および読み手・視聴者の男性たちの好奇心まなざしがみえ隠れする。

「女流」は、表24のように、「女流作家」の三件をはじめとして、五件みられた。

こういった、性別冠詞の九六・七%をも占める女性冠詞に対して、合計一〇件、三・三%にとどまる男性冠詞を、表25で一括してみてみると、「男」がかんむりにつくことばは、「男児」のみで三件、「男性」がかんむりにつくことばは、「男性コーラスグループ」「男性社員」「男性ピアノ弾き語りアーティスト」など三種類で五件、「男子」がかんむりにつくことばは、「男子モデル部員」「男子高校生」のみで二件しかみられなかった。こうした極端な量的対照性は、女性たちが、テレビ番組や番組面において、いかに大事な「売り物」とみなされているかを、顕著にあらわしている。まさにメディアにおける女性の商品化である。

(2) ジェンダーを含み込んだ職業語

テレビ・ラジオ面にあらわれた性別冠詞については、極端なジェンダーの非対称性がみられたが、ジェンダーを含み込んだ職業語についてはどうであろうか。グラフ11にみるように、総計一三

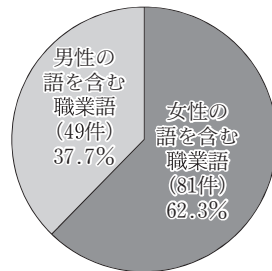
○件のうち、女性の性を含み込んだ職業語は八一件、六二・三%、男性の性を含み込んだ職業語は四九件、三七・七%となった。本紙では合計二九七件中、女性の性を含み込んだ職業語は五〇・二%、男性のそれは四九・八%と全く半々であったことと比べると、職業語に関しても、やはりテレビ・ラジオ面においては、ジェンダーの非対称性がみられるというべきだろう。

表 26 に掲げたように、女性の性を含み込んだ職業語のトップは「歌姫」一件で、「今夜限定ライブでは歌姫・ケイコも登場」(「ズバリ言うわよ!」TBS、三日)、「歌姫絢香とマジ対決」(「音楽戦士」日本テレビ、六日)、「新歌姫ベアフット登場」(「リアリティ2」J-WAVE、一三日)など、歌番組の案内がほとんどを占めている。

次に多いのは、「若おかみ」八件で、たとえば「温泉若おかみの殺人推理・飛驒高山」(「幻の名酒連続殺人!!」冷やされた死体の謎:嫁姑の推理対決!」

表26 女性の性を含み込んだ職業語
(単位:件)

順位	表 現	合計
1	歌姫	11
2	若おかみ	8
3	ヒロイン	7
4	OL	5
5	ギャル	4
	代理母	4
	魔女	4
8	女将	3
	ミス・ユニバース	3
10	家政婦	2
	準ミス知花	2
	部長OL	2
	ミス中央	2
	ヤマンバ	2
	巫女	2
16	おかみ	1
	キャバ嬢	1
	ギャル社長	1
	コールガール	1
	侍女	1
	女郎	1
	シングルマザー	1
	シンデレラ	1
	スケバン刑事	1
	ナース	1
	売春婦	1
	ホステス	1
	ママ	1
	ミス知花	1
	メイド	1
	レディース	1
	準ミス	1
	女中衆	1
	新メイド	1
	芸者	1
	合 計	81



グラフ11 テレビ・ラジオ面における性別を含み込んだ職業語の女男比(3紙合計130件)

表27 男性の性を含み込んだ職業語
(単位:件)

順位	表 現	合計
1	OB	12
2	ホスト	9
3	サラリーマン	5
4	営業マン	4
5	スポーツマン	3
	文士	3
7	Gメン	2
	英雄	2
	紳士	2
10	親方	1
	カメラマン	1
	貴公子	1
	ヒーロー	1
	ビジネスマン	1
	メンズ	1
	若旦那	1
合 計		49

〔土曜ワイド劇場〕テレビ朝日、一四日)などがあげられる。ドラマにおけるあらゆるシチュエーション〔温泉〕「若おかみ」「飛騨高山」等)と、一種の小道具〔殺人〕「幻の名酒」「死体」等)が網羅されているこれらのコピーを読むだけで、内容が推しはかられ、ドラマ性〔推理〕「冷やされた死体」「謎」「嫁姑」「対決」等)が感じられる。ほかに、「旅館女将」(「一期一会」NHK教育、七日)などの「女将」(三件)や「おかみ」(一件)もあり、メディアは宿や飲み屋の「おかみ」が「好み」であるらしい。

「若おかみ」に続くのは、「ヒロイン」の七件、「OL」の五件などである。「ヒロイン」と「OL」の語は、番組表で使われるよりも、どちらかといえば番組解説欄で使用される傾向が強いようだ。さらに、「ミス」も多く用いられており、それらは全ていわゆる「ミスコンテスト」に関連した語である。「ミス・ユニバース」の三件をはじめとして、「ミス」がつくものを全部合計すると九件に達し、二位に浮上する。テレビというものが、女性の「容姿」

や「身体」を売りにしていることを、如実に示す事例である。

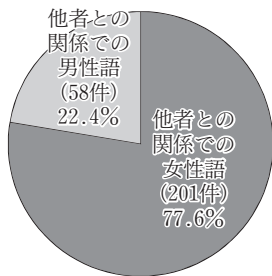
男性の性を含み込んだ職業語は、表27に示したとおりである。「警察OB連続殺人のナゾ!」ついに父の死の真相明らかに!」〔アンフェア the special・コードブレイキング——暗号解説〕フジテレビ、三日)、「エリート警視と人情弁護士OB二人の捜査本部」(「再会殺人事件」テレビ朝日、一三日)など、「OB」が最多で一二件、次いで「ホストに聞いた〃世渡りが上手そうな有名人〃」(「ザ・ワイド」日本テレビ、一三日)のように、ブームといわれる「ホスト」九件が続いた。

「サラリーマン」は、合計五件がカウントされたが、内訳は、明らかに男性を意味する用法が一件、女男を含めた勤め人一般をさす用法が二件、職業の代表として挙げる用法が二件である。それ以外にも、「営業マン」「スポーツマン」「Gメン」「カメラマン」など、「マン」のつく職業語が、本紙同様、少なからず使用されている。

(3) 他者との関係で女男があらわされることば

他者との関係で女男があらわされることばは、合計で二五九件が数えられた。内訳をみると、グラフ 12 に掲げたように、他者との関係で女性があらわされることばは二〇一件、七七・六%、他者との関係で男性があらわされることばは五八件、二二・四%みられた。この値は、偶然にも、本紙では総数にして三七〇件あった同表現中の、女性があらわされることば(七七・六%)、男性があらわされることば(二二・四%)の比率と全く同じであった。

表 28 は、他者との関係で女性があらわされることばについての順位表であるが、最多は「夫人」関連で、合計四八件みられた。他者との関係で女性ที่あらわされる語全体のうち、四分の一近くが「夫人」関連の語ということになる。「夫人」がつく語は、①「妻の名+夫人」、②「夫人」単独、③「夫の肩書き+夫人」、④「夫の姓+夫人」、⑤その他の五種類に分類することができる。表 28 をみると、①の用例である「昭恵夫人」が一七件とトップで、九月に小泉純一郎首相に替わって総理の座についた安倍晋三新首相の妻として数多く登場している。「総理の電撃訪問 韓流大好き昭恵夫人も」(報道ステーション)テレビ朝日、九日)、「ファーストレディー昭恵夫人は韓流ファン



グラフ 12 テレビ・ラジオ面における他者との関係であらわされる語の女男比(3紙合計259件)

表28 他者との関係で女性があらわ
されることば

(単位:件)

順位	表 現	合計
1	夫人	48
	昭恵夫人 (妻の名+夫人)	(17)
	デビ夫人 (妻の名+夫人)	(8)
	夫人 (夫人単独)	(8)
	安倍夫人 (夫の姓+夫人)	(6)
	公爵夫人 (夫の肩書+夫人)	(6)
	安倍首相夫人(夫の肩書+夫人)	(3)
2	嫁	28
3	姑	22
4	奥様	21
5	主婦	17
6	令嬢	9
7	お嬢様・お嬢さん	5
	姉さん女房	5
9	兄嫁	4
	新妻	4
11	ファーストレディ	3
	プリンセス天功	3
	鬼嫁	3
	人妻	3
15	歌姫	2
	家事手伝い姫	2
	マダム	2
	愛娘	2
	嫁姑	2
	姫・姫さま	2
21	かおる姫	1
	皇后	1
	しゅうと	1
	シンデレラ	1
	西太后	1
	セレブ奥様	1
	太后	1
	女房	1
	プリンセス	1
	プリンセス・アリエル	1
	社長令嬢	1
	新婦	1
	弟嫁	1
	富豪娘	1
	合 計	201

初仕事は?」(「みのもんだ朝ズバッ!」TBS、九日(翌日は休刊日につき一〇日の分のプログラム)のように、新聞本紙と同様、「首相の妻」の動向がニュースバリューを持つようであるが、その中身は、「韓流ファン」であることへの言及であって、外交や政治的な能力ないしそれへの期待についてふれたものでは決していない。これと、「デビ夫人VSピーコ軍団が大激突」(「行列のできる法律相談所」日本テレビ、一五日)のように、タレントとしてバラエティー番組への登場度が高い「デビ夫人」の八件を足すと、「妻の名+夫人」は合計二五件となる。

次いで多かったのは、「ゴヤと公爵夫人のかなわぬ恋」(「迷宮美術館」NHK、六日)などの「公爵夫人」六件、および「安倍首相夫人の外交術」(「知的冒険ハッケン!!」フジテレビ、七日)に典型的な「安倍首相夫人」三件の「夫の肩書き+夫人」で、合計九件がみられた。そして「安倍総理&夫人訪韓」(「やじうまプラス」テレビ朝日、九日(翌日休刊につき一〇日分))のような「夫人」の単独使用が八件、「夫の姓+夫人」の「安倍夫人」が六件で

それに続いている。

他者との関係で女性をあらわす語で次に多いのは、「嫁」の二八件、「姑」の二二件であった。これら「嫁」「姑」関連では、ほかに「兄嫁」ということが四件、「鬼嫁」が三件、「嫁」と「姑」がセットになった「嫁姑」が二件、「弟嫁」が一件みられた。テレビ番組において、「嫁25人VS姑25人号泣者続出壮絶バトルを細木怒りの徹底仲裁」(「幸せって何だっけ修羅場必至嫁姑大戦争SP」フジテレビ、六日)、「人生相談・こんな姑はイヤだ」(「こたえてちょーだい」フジテレビ、一二日)、「姑達と仁義なき戦い」(同日同番組) などのような「嫁と姑の対立」は、ドラマであれ、ドキュメンタリーであれ、バラエティーであれ、またワイドショーであれ、視聴者の興味を惹くための「永遠のテーマ」となっているようだ。

また、夫人、嫁、姑に次ぐ四位以下の語をみると、「奥様」「令嬢」「お嬢様」「マダム」「セレブ奥様」「社長令嬢」「富豪娘」など、日本でも一九九〇年代中ば以降顕在化した「格差社会」にあつて、視聴者の「高階層」への憧憬をおおるような表現が目立っている。「見ため20代実は40代セレブ奥様の若肌を保つ5つの秘密」(「朝はビタシン!」テレビ東京、六日)などは、「セレブ」でありかつ「若さを保つ」という、二重の憧れを満たしてくれるキャッチフレーズも使われている。また、「主婦」の語が二一件と、「奥様」の二二件に次いで多く使われているが、「スターに変身・29歳主婦」(「2時っチャオ!」TBS、二日)、「ついに発見!究極の光熱費節約スゴい主婦」(「リアルタイム」日本テレビ、四日)のように、非日常と日常の両極を揺れ動くのが、テレビ番組における「主婦」像である。

一方、男性が他者との関係であらわされる表現は、表29に示したように、「王子」が五一件と、男性表現全体のおおんどを占めた。これらの多くは、〇六年夏の高校野球甲子園大会で有名になった「ハンカチ王子」こと、斎藤

表29 他者との関係で男性があらわされることば

(単位: 件)

順位	表 現	合計
1	王子	51
2	皇太子	3
3	お婿さん	1
	ダンナ	1
	花婿	1
	亭主	1
合 計		58

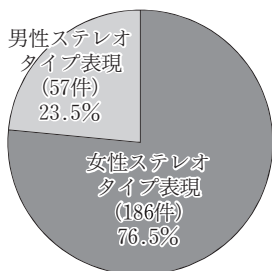
祐樹選手のことである。「ハンカチ王子国体出場」「スポーツ魂」テレビ東京、一日」ということで再度話題となり、各局は、「再びハンカチ王子の人氣が過熱? 球場に女性殺到」「イブニング5」TBS、二日」といった形で扱った。もともと、この点は新聞本紙も同様である。また、「皇太子」の語が三件みられた。

(4) テレビ・ラジオ面のステレオタイプ表現

テレビ・ラジオ面は、視聴してもらうためセンセーショナルな惹句に満ちている。当然、紋切り型の表現も多いと推測される。これらの面におけるジェンダー・ステレオタイプ表現は、グラフ13に示したように、合計

二四三件みられたが、内訳は、女性に関するステレオタイプが一八六件、七六・五%、男性に関するステレオタイプが五七件、二三・五%である。

この値は、本紙の傾向とはだいぶ異なっている。新聞本紙では、このところ男性の容姿・服装などにふれたステレオタイプ表現も増えてきており、女男のステレオタイプ表現比率は接近しつつある。○六年調査では、本紙のステレオタイプ表現は、女性ステレオタイプが二五一件、五四・八%に対して男性ステレオタイプは四五八件、四五・二%であった。ところが、テレビ・ラジオ面においては、およそ八対二で、女性に関するステレオタイプ表現の方が圧倒的に多いという結果となった。テレビ・ラジオ面は、内容説明文の全般的なセンセ



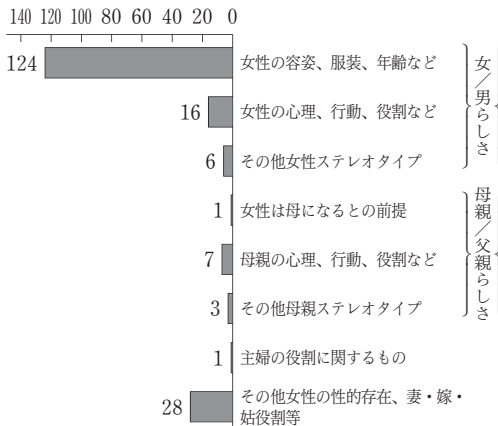
グラフ13 テレビ・ラジオ面におけるステレオタイプ表現の女男比 (3紙合計243件)

ーシヨナリズムに加え、女性についての紋切り型のディスクリによって、視聴者を惹きつけようとしているようである。

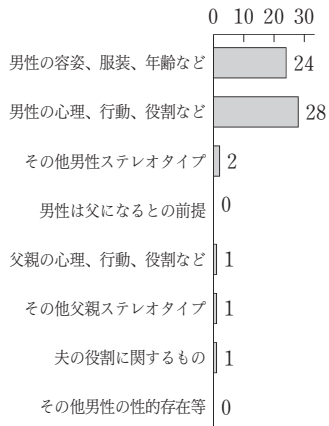
女性に関するステレオタイプ表現の内訳をみると、グラフ 14 に示したように、かなりの部分を「容姿、服装、年齢など外見」に関するステレオタイプが占めており、その件数は一二四件、比率にして六六・七％に達した。「2006 秋民放各局完全同時中継 TV 局の芸人美女軍団が完全包围」(ロンドンハーツ、テレビ朝日、三日)、「全国・小さな村の大スター 島で唯一の美人医師」(日曜ビッグ)テレビ東京、八日)、「金髪美女記者が発見・MLB 祐ちゃんフィーバーとは？」(J スポ)TBS、八日)、「元局アナ美人妻」(サンデー・ジャポン)TBS、八日)、「中継ラジかみ甘い楽園 女子の性病美女医警告」(ラジかるッ)日本テレビ、九日(翌日休刊につき一〇日分)、「演歌超好き・米国富豪社長が美人歌手に求愛」(世界バリバリバリュー)TBS、一日)といった具合である。テレビ面は「美人」も「好き」だ。

「心理、行動、役割など」のステレオタイプ表現は一六件みられ、たとえば「午前 5 時・愛か正義か揺れる女心：究極の決

女性のステレオタイプ表現
(3 紙合計 186 件) (単位：件)



男性のステレオタイプ表現
(3 紙合計 57 件) (単位：件)



グラフ 14 テレビ・ラジオ面における性別ステレオタイプの内訳

断!」(「24 IV」(フジテレビ、九日(翌日休刊につき一〇日分))、「女の意地バトル始動」(「愛エプロン」テレビ朝日、一日)や「コンビニ女心戦略」(「めざましテレビ」フジテレビ、一三日)といった記述があげられる。

「壮絶・不妊との闘い 旧家に嫁いだ39歳妻:体外受精7回目も失敗 夫の苦悩」(「リアルタイム」日本テレビ、三日)という番組は、「女性には母になるとの前提」のステレオタイプ表現であるが、「旧家に嫁いだ」という表現は「妻役割」のステレオタイプとしてもカウントしてある。同様に、先に例としてあげた「温泉若おかみの殺人推理・飛驒高山」幻の名酒連続殺人!!冷やされた死体の謎:嫁姑の推理対決!」(「土曜ワイド劇場」テレビ朝日、四日)は、「若おかみ」が「容姿、服装、年齢など」外見に関するステレオタイプであるとともに、「嫁姑」も「妻役割」のステレオタイプである。このように、一つの番組説明のコピー文における、ステレオタイプ表現は、まことにハイブリッドな構成となっている。

他に目立ったのが、女性を「性的存在」としてステレオタイプ化する表現である。たとえば、「杉本彩米倉涼子が語る大人の女のモテ術・石田純一、ジローラモ、艶男達のメガネにかなういいオンナは?あなたの艶度アップ」(「さらに!モテる女への道2006オースタム」TOKYO FM、九日)、「ロデオ&悩殺ミニスカ」(「ぶっすま」テレビ朝日、九日(翌日休刊につき一〇日分))、「相沢咲姫楽ヒミツの性」(「ラジかるッ」日本テレビ、九日(翌日休刊につき一〇日分))、「少女達の性事情」(「ザ・ワイド」日本テレビ、一日)、「森クミ豊乳プレー」(「ダウンタウン超DX」日本テレビ、一二日)など、男性の好色なまなざしに応えるかのような、女性のセクシュアリティを強調した表現がみられる。

一方、男性のステレオタイプ表現は、グラフ14にみるように、まず、容姿等に関する言及を中心としたものが二四件で、第二位を占めるが、女性のその五分の一でしかない。「夫は14歳年下イケメン」(「スーパードールニュース」

フジテレビ、二日)、「脇甘い? 民主イケメン議員の系譜を徹底検証」(「スーパーモーニング」テレビ朝日、二日)、「イケメンがアイドルがお笑いが: 号泣ダンス」(「シャルウィダンスSP」日本テレビ、七日) などのように、「イケメン」はテレビにおける大事な要素であり、女性ほどではないにせよ、「男も顔」となりつつあることは、間違いないようである。

「イケメン」という、「ルックスのいい男性」をあらわす比較的新しい語と並んで、「ちよい不良^{ワル}オヤジ」ということばも、調査時点の流行語であった。番組表では、男性の「心理、行動、役割など」を固定化するステレオタイプ表現として、「ちよい不良オヤジ対決」(「笑っていいとも! 2006 秋の祭典SP!」フジテレビ、七日)をはじめとして、いくつか使われていた。ちよつと不良っぽい中年男性がカッコイイということのようである。一方で、「結婚できない女VS超ダメ男」(「だめんずうおうかく」テレビ朝日、一二日)のように、「ダメ男」というマイナスのレッテルも、テレビ欄に登場するようになっていく点が興味深い。今や「おバカ」とか「ダメ男」などが「売り」になる時代なのである。加えて目立ったのが、「Aボーイお乳に爆走」(「ぶっコギ」日本テレビ、三日)、「袋とじは男のロマン?」(「未来創造堂」日本テレビ、一三日) などの男性の性的な行動や心理に関する表現であった。「袋とじ」とは、雑誌で過激なヌードグラビアなどのページが袋状に閉じて製本され、内容がひと目ではわからないようになっていくページのことである。このほか、「二人の男の生き様」(「ワンピース」フジテレビ、八日) といった旧来の紋切り型の表現もがみられ、これら「心理、行動、役割など」に関する表現は最多の二八件が数えられた。

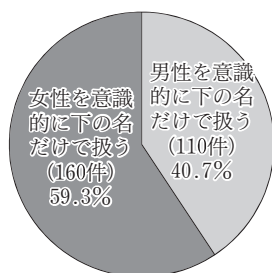
なお、男性の「性的存在」に関するステレオタイプ表現は〇件であった。全般的に、女性はやさしく容姿など外見に特化され、次いで性的存在や妻役割、嫁役割、姑などにステレオタイプ化される傾向がみられる。一方男性は、心理、

行動等に関して言及されることが最も多いが、容姿等に関する言及も少なくない。また男性は性的な行為主体として表現されているのに対し、女性は、性的な対象として表現されることが多い。

(5) 人物を意識的に下の名のみで扱う表現

テレビ・ラジオ面は、芸能関係が多く扱われるためもあってか、タレントやアイドルを下の名で呼称する傾向が強い。「愛ちゃん注目生出演輝く春へ」(フジテレビ、一二日)、「興毅のお気に入りメガネ」(TBSテレビ、一二日)、「聖子&明菜&中山美穂」(テレビ朝日、一三日)、「紳助が古畑警部に返信SP」(日本テレビ、一四日)などのように、スポーツ選手、歌手、タレント司会者など、女男を問わず名のみで登場するケースが多い(ここでは番組名はカットした)。それでも女男で比較してみると、女性が名のみで呼ばれる頻度がより高く、グラフ15に示すように、合計二七〇件のうち、女性が一六〇件、五九・三%に対し、男性は一〇〇件、四〇・七%であった。

今回は、先にも紹介した「ハンカチ王子」が再クロースアップされ、「祐ちゃん」(テレビ朝日、一日)「ハンカチ王子コロコロうちちゃん登場?」(テレビ東京、一三日)など、斎藤佑樹選手の下の名が目立った。対象への「親密性」が増すと、ファーストネームで呼ぶ傾向が高まるとされるが、「巨泉が胃がん友だちの王監督マル秘情報初公開」(テレビ東京、二日)、「裕次郎も通った奇跡の鍼灸医」(テレビ東京、二日)などはそういったケースであろう。一方、「村尾&星野仙一&真央」(日本テレビ、二日)、「珠緒&梅宮は大暴走」



グラフ15 テレビ・ラジオ面における意識的に下の名で扱う表現の女男比(3紙合計270件)

(テレビ朝日、六日) などのように、男性は姓またはフルネームなのに対して女性は名のみという、二重規準表現のケースもみられる。

その典型が、調査期間中に国会で繰り広げられた、新首相の安倍晋三総理と田中真紀子衆議院議員のやりとりを報じるテレビ欄のディスクリールである。たとえば「対決速報 安倍首相VS真紀子議員」(「ザ・ワイド」日本テレビ、六日)、「真紀子議員VS安倍総理 予算委で直接対決」(「Jチャンネル」テレビ朝日、六日)、「安倍VS真紀子軍配は」(「ニュースJAPAN」フジテレビ、六日)、「真紀子が総理に怒る」(「ズームイン!!サタデー」日本テレビ、七日)、「真紀子節さく裂」(「ウエーク!」日本テレビ、七日)、「真紀子氏メッタ斬り」(「スクランブル」テレビ朝日、七日) といったように、各局のニュースショーは、いずれも判で押したように田中真紀子についてののみ下の名で表示していた。もつとも、本紙でも同様のダブルスタンダードはみられたから、女性に対するこうした「見方」は、マス・メディア全体のメンタリティをあらわしているのだろう。

ただし、男性の政治家が全て姓やフルネームで記載されているわけでもない。「慎太郎知事もぶ然」(テレビ朝日、六日)、「3年間で4500万円たまる?カラクリに宗男が実態暴露」(テレビ朝日、一四日)、「岐阜が裏金を超える使い道:激論康夫VSさつき」(テレビ朝日、一四日) のように、名だけで扱われるタレント化した男性の政治家も、現在は皆無ではない。ちなみに、「慎太郎」は石原慎太郎都知事、「宗男」は鈴木宗男衆議院議員、「康夫」は田中康夫参議院議員(当時)、そして女性で名のみ表示の「さつき」は片山さつき衆議院議員(当時)である。

もともと、田中真紀子と同様に、いずれもひと癖もふた癖もあつてメディアへの露出度も高い政治家たちではあるが、新聞本紙は「慎太郎」「宗男」「康夫」という表現をほとんど用いない。一方、テレビは、あらゆる人物を身近にし、オーディエンス(視聴者)が、これらの人物と擬似親密圏を形成する装置としての機能を、より顕著に発

揮しているように見受けられる。「イケメン」「ダメ男」、そして男性に対する下の名のみの呼称使用により、量的には女性に対するほどではないにしろ、男性のジェンダーをも消費してやまないという点で、テレビは新聞を凌駕しているといえるかもしれない。

考えてみると、新聞は、テレビ・ラジオ面によって部数を伸ばし、一方、テレビやラジオは、新聞のテレビ・ラジオ面によって視聴者を獲得してきた。その意味で、両メディアは「共存共栄」してきたといえる。しかしながら、民放テレビ各局（さらに一部ラジオ局）は、いずれも経営的・人事的に新聞社の系列下にある。新聞倫理綱領で「人権の尊重」や「品格」を掲げる新聞は、傘下であるテレビ・ラジオのジェンダー表現、さらには人を消費し蕩尽する番組表現の現状を、黙認したままでよいのか、問われる時期にきているといえよう。

IV 少年とは誰か

1 「標準」としての男性

女性と新聞メディア研究会による一九九六年以降の三回にわたる調査では、多用される職業語である「サラリーマン」の用法について、詳細な検討を加えてきた。⁽²⁵⁾これは、「サラリーマン」ということばが、「男性の勤め人」という用法以外に、女性・男性を含む勤め人一般の意味で用いられ、新たな「女性隠し」を生み出していると懸念されるからである。語尾の「マン」の部分に性が組み込まれ、受け手に男性イメージを抱かせるにもかかわらず、し

ばしば女男両方をさす用法として使われている。中村桃子のことばを借りれば、「マン」(man) が男をあらわすと同時に、(英語における)「文法規則」により、「人間」一般をあらわすことから、あたかも男が人間の代表、人間の基準のように理解されてしまうのである。²⁶⁾ このことを、本研究では、新聞におけることば・表現の「男性標準」として提示してきた。

今回は、「少年」「青年」という語に關しての考察を行つてみたい。これらの語は、先に分析した、「サラリーマン」や「ビジネスマン」と違つて、一見中立を装っている。というのも「少」にも「青」にも「年」にも、性が表示されているわけではないからである。しかし、そのことが、「男性標準」についてさらに考えてみる上で、参考になるのではないかと思われる。

2 新聞紙面における「少年」の用法

「少年」とは、確かに字面の上では、女男を含む年少者である、しかし、このことばは同時に、男性の年少者をもあらわしている。むしろ実際の用法では、圧倒的に男性の年少者をさす場合が多い。今回の調査においても、表 30 に示したとおり、少年という語が合計二〇三件カウントされたうち、明らかに男性をあらわす用法が三紙合計で一五五件、全体の七六・四%を占めていた。一方、年少の女・男両方を含む用法は、法律関係の用語(少年法、少年事件、少年院など)や団体・機関などを示すもの(スポーツ少年団、少年野球チームなど)が主で、三紙合計で四二件、二〇・七%であった。この「少年」ということばが、女男両性を含めた表現として単独で用いられている記事は、一〇件にとどまっている。

表30 記事中で使用されている「少年」の使われ方の内訳

(単位:件)

	朝日		毎日		読売		合 計
明らかに 男性	少年	39	少年	31	少年	45	155
	少年少女	3	少年時代	3	少年時代	6	
	少年時代	2	勤労少年	2	少年少女	1	
	不良少年	2	少年期	2	映画少年	1	
	ブディア少年	2	少年少女	1	少年愛	1	
	西山少年	1	チャンバラ少年	1	少年の表情	1	
	少年兵	1	天文少年	1	サッカー少年	1	
	少年誌	1	オシム少年	1	野球少年	1	
	美少年	1	前田少年	1	少年野球部員	1	
					少年成長もの	1	
					少年忍者漫画	1	
	小 計	52	小 計	43	小 計	60	
女男両方	少年	7	少年刑務所	4	少年犯罪	4	42
	少年法	3	少年	3	少年事件	2	
	少年犯罪	2	少年法	2	少年野球	1	
	スポーツ少年団	2	少年審判	2	スポーツ少年団	1	
	少年事件	1	少年院	1	少年審判	1	
	少年刑務所	1			少年捜査課	1	
	少年野球チーム	1			少年育成課	1	
					少年刑務所	1	
					少年法	1	
	小 計	17	小 計	12	小 計	13	
あいまい	少年たち	5	—	0	少年たち	1	6
	小 計	5	小 計	0	小 計	1	
少女	少女	29	少女	58	少女	40	142
	少年少女	3	少女歌手	1	少女漫画	1	
	少女時代	2	少女漫画	1	少年少女	1	
	少女漫画	2	少年少女	1			
	美少女	2					
	少女言語	1					
	小 計	39	小 計	61	小 計	42	

このように、一見ニュートラルな外観を装いながら、実際には男性をさす「少年」ということばを紙面で多用することにより、また、男性イメージの強い「少年」を女性と男性の双方を包摂する法律用語等として、吟味することなく使い続けることにより、新聞は、人間の元型を暗黙のうちに男性とみなす「男性標準」な見方を、知らず知らずのうちに読者に対し補強する役割を、果たしているといえるのではないだろうか。

ちなみに、「少年」を集計する際に参考として数えあげた「少女」は、三紙合計一四二件と、「明らかに男性をあらわす

少年」の件数と近似した数値を示している。そこには「少年漫画」と「少女漫画」、「少年時代」と「少女時代」のような対比があり、「少年」＝年少の男性をさらに印象づける結果となっている。

以下に、「少年」の各用法の典型的な記事例を示しておく。

まず、「少年」が年少の男性をさして用いられている記事を、いくつかあげておく。

「本屋さんまでふらふら歩いていたら、バイクに乗った少年に追い抜かれた。ちらつと見えた横顔から、かつてキャッチボールをした近所の少年と分かる」(読売、六日)

「古い教室で少年が不思議な同級生と出会う」(朝日、一日)

「寮をのぞくと少年が声をかけてきた。『こんにちは』。声のぬくもりに居場所を感じた。」(毎日、九日)

以上は、「少年」が単独で用いられている事例だが、「少年」と「少女」が対で用いられている記事の例としては、「小学生ら 3 人放火 9 件」の見出しがついた「3 人は伊勢原市の同じ小学校に在籍していた。少年 2 人が火をつけ、少女は見張り役だったという」(読売、六日夕刊)があげられる。

次に、女男両性を含む用法についてみてみよう。総数は四二件であるが、そのほとんどを「少年法」「少年審判」「少年刑務所」といった法律関係用語が占め、三二件を数えることができる。この用法の典型的な例としては、恐喝と詐欺容疑で逮捕された「少女」の事件を伝える、「運転手は、少女の乱行を知り、そして、寂しさも知っていた。……ただ、群馬県の少年院に入る少女に、手紙を出そうと思っている」(毎日、一四日夕刊)という記事があることができる。つまり、「少女」も罪を犯せば「少年院」に入るというわけだ。少年法では、「第二条 この法律で「少年」とは、二〇歳に満たないものをいい、「成人」とは、満二〇歳以上の者をいう」とのみ定義されており、性別についての言及はない。「少年」は「少女」をも包摂するのである。

このほか、女男双方を含む少年の用法としては、「スポーツ少年団」「少年野球チーム」のように、団体名やスポーツ名と結びついた形のがみられる。このように、女男両方を含む用法においては、「少年+ α 」という使い方がなされていることが多い。

「少年+ α 」という使い方以外で、「少年」が「女男両方」をさす用例としては、毎日七日新月刊の「飛ばない球投手救う」という見出しで、野球のボールについて解説を行っている記事中の「少年から社会人まで」や毎日一四日の「富山のBCリーグ発足」という見出しのついた記事中にある「少年向け巡回野球教室などを通じて地域への浸透を図り」などがあげられる。また、「少年の『親殺害』急増」(朝日、一四日夕刊)では、「少年」という語が五回出てきている。しかし、「少年+ α 」がすべて女男両方を含んでいるかというと、逆は必ずしも真ではない。たとえば「少年誌」「少年時代」などは、男性をさしていると考えられる。

これまで、「少年+ α 」という使い方に触れてきたが、これに対し、「 α +少年」という表現の中の少年は、一転して男性をさすものとなる。たとえば、同じ「少年」と「野球」という組み合わせでも、「野球少年」となると、表20の一段目に分類したように、野球に夢中になっている男の子の意味となる。「チャンバラ少年」や「映画少年」なども、「男性」をイメージさせる「少年」である。

さらに、ここに、「名前+少年」という表現が登場する。「ブディア少年」(朝日、一四日)、「オシム少年」(毎日、一三日)などであり、合計五件みられた。一方、「少女」に関しては、このような「名前+少女」の例は一件もカウントされなかった。これは、後述する「青年」にもみられることで、「タカノ青年」(読売、四日夕刊)として登場しているのは、明らかに「男性」である。

男性は、○○少年→○○青年→○○氏(さん)というように成長していくようだが、女性の成長過程はどのよう

にあらわされるのだろうか。「少女」と「少年」には、成長の概念が違って付与されているのだろうか。⁽²⁷⁾ いみじくも「少年成長もの」なる語もみられた。これはテレビの新番組の紹介記事であるが、「日本テレビ系で一六日から始まる『結界師』は、『週刊少年サンデー』で連載中の渡辺イエロウの漫画が原作だ。……『原点回帰した王道の少年成長ものを送り出したい』と、制作する読売テレビの諏訪道彦プロデューサー」（読売、一二日夕刊）と書かれている。この「少年」も、男性をイメージさせるが、読み手に男性を想定した『少年サンデー』の連載漫画が原作である。「王道の少年成長もの」の世界には、「少女」が主人公として登場する余地はほとんど残されていない。

ところで、表 30 の三段目に掲げられているように、男性のみをさすのか、それとも女男両方をさすのかがあいまいな表現として、「少年たち」が六件カウントされている。例えば、朝日七日夕刊には、「日本の SF イラストの先駆者、小松崎茂の世界を紹介する『ぼくらの小松崎茂展』が、……始まった。昭和の少年たちを夢中にさせた船舶、航空機の絵やプラモデルのパッケージ、特撮映画のメカの模型など、……展示されている」とあるが、はたして小松崎茂のイラストに夢中になった子どもたちの中に女の子はいなかったのであろうか。「少年たち」の「たち」には、年少の女性が含まれているのかもしれない。しかしながら、たとえいたとしても、「少年たち」という語が使われた途端に、その主体としての輪郭はいまいとなり、「少年」の背後に隠されてしまうのである。

一方で、年少の男性とともに年少の女性の存在がはつきりと描かれる「少年少女」という用法も、合計五件みられた。そのなかで特に興味深いのは、今しがたあいまいな例として出した「ぼくらの小松崎茂展」についての、日付は違うが、同じ朝日新聞で、漫画家の永井豪の談話の形で掲載された記事に、「私が小松崎先生の作品と出会ったのは、幼児の頃、兄たちが愛読していた『冒険活劇文庫』の絵物語「地球 SOS」だった。……バグア彗星人という恐ろしい宇宙人や、美しい顔の少年、少女が印象に残っている」「先生の作品の魅力は、何といってもキャラ

クターに美しさがあることだ。美少年、美少女が生き生きと描かれていて楽しい」（朝日、三日夕刊）とあることだ。ここでは、話者の永井が視覚的に「少女」と判断できるイラストをみたがゆえに、年少の女性の存在に言及せざるを得なかったと考えられる。しかし、ひとたびそれに夢中になった子どもたちについて記述する段になると、先にみた記事例のように、不特定多数の年少者の中に「少女」がいたかどうかは、あいまいなままとされてしまうのである。

3 新聞紙面における「青年」の用法

次に、「少年」から少し成長した「青年」についてみてみよう。

表31に示したように、全体で五三件が数えられた中、明らかに男性をあらわす用法は、三紙合計で四四件、八三・〇％を占めていた。これに対し、女男両方を含む用法は、九件、一七・〇％にとどまっている。表面上は非性的でニュートラルな体裁を装った「青年」が、その実男性というジェンダーを色濃く投影したことばであることが、如実に示されているといえよう。

「青年」が明らかに男性をさして用いられている記事の一例とし

表31 記事中で使用されている「青年」の使われ方の内訳

(単位: 件)

	朝日		毎日		読売		合 計
明らかに男性	青年	11	青年	6	青年	17	44
	文学青年	2	青年医師	2	青年医師	1	
	政治青年	1	自閉症青年	1	タカノ青年	1	
	青年部長	1	青年文士	1			
	小 計	15	小 計	10	小 計	19	
女男両方	青年	2	青年期	2	青年期	1	9
	青年スポーツ	1	青年団	1			
			青年議会	1			
			青年会館	1			
	小 計	3	小 計	5	小 計	1	
あいまい	—	0	—	0	—	0	0
	小 計	0	小 計	0	小 計	0	
青少年	—		青少年	5	青少年	4	10
			青少年時代	1			
	小 計	0	小 計	6	小 計	4	

ては、飲酒運転事故キャンペーンを扱った新聞週間の記事における「近所の住民や同僚らは、『子供やお年寄りに
も優しく明るい青年』と口をそろえた」(読売、一三日)があげられる。

また、女男を含めた若年の人の意味で用いられる「青年」は、先の「少年」同様、おもに「青年団」「青年議会」
のような、団体名や議会名などとして出現している。たとえば、仏独歴史教科書づくりのきっかけが「両国合同の
青年議会」であつたと解説する毎日九日の記事などが、そうである。

このほか、「青年期」は、一般的には女男両方を含む表現であるが、今回は、「二人はともに明治の世に青年期を
過ごした」(読売、一三日)や、「(加藤高明の)イギリスモデルは青年期から徹底してのことなのだ」(毎日、八
日)といった記事において、男性の登場人物についての記述の中で使われていた。もし記事に登場する人物が女性
のみだとしたら、どのように表現されていたのか興味深いが、今回の調査の範囲では、発見することができなかつ
た。

女男両方を含む「青年」が単独で使用されている記述としては、朝日の「ベトナムでは……仏の植民地支配に反
発し、運動に共鳴する青年たちが集まった」(四日夕刊)と、「かつては多くの青年の命を奪った結核」(一四日)
の二件がみられた。

中村桃子は、先に引用した著作の中で、「人間」と「男性」および「女性」の関係、ならびに女男を含めた年少
者をさす「少年」と男性の年少者をさす「少年」および女性の年少者をさす「少女」の関係をそれぞれ図式化して
いるが(図1a、図1b)、「青年」ということばも、これらと同様の図式化が可能であろう。ただし、「青年」に
は、「少年」の対である「少女」に対応する、「青女」という用語はみあたらず、それにかわることばとして、とき
に「娘」という語が用いられる(図1c)。いずれにせよ、どちらの場合も、人間の原イメージは男性である。

このように、新聞の紙面上では、男性を暗黙の標準とみなす言語・表現実践は、いまだ途切れることがない。

『少女少年のポリティクス』の序章において、吉田司雄は、明治期の『少年』雑誌を分析して、一八九〇年ごろ(明治二〇年代前半)の雑誌『少年園』の表紙に女男の子どもが描かれていることなどから、「少年」というカテゴリーは女男両性を含みうるものであったと考えている。

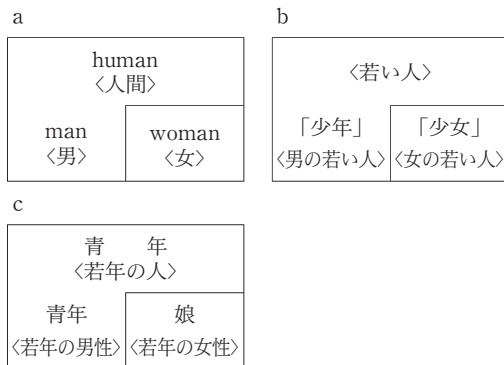
しかしその後、一八九五年ごろ(明治二〇年代後半、日清戦争のころ)から、「雄々しい少年」が描かれた。さらに、『少年世界』誌が、「少女欄」を創設し、「少女」が「少年」に包含され、真の「少年」たる男子の劣位項として立ち上げられたと、吉田は考察している⁽²⁹⁾。

この図式が、一〇〇年以上の長きにわたり継承され、今日に至っている、といえそうである。

「少年」は、本来ニュートラルなことばである。しかし、それを「少女」と対のことばとして使用すると、少年は男性の年少者を、くつきりと際立たせてしまうことになる。

女性の年少者と男性の年少者を対等に表現しようとするならば、片方にニュートラルなことばを、もう一方に有徴性を帯びたことばを対置させることはできない。「少年」を、女男両性を含むことばとして残そうとするならば、

図1 人間、少年、青年



出典：aとbは、中村桃子『ことばのフェミニズム』勁草書房、1995年、25頁および31頁にもとづく。

男性の年少者をあらわす新語（たとえば「少年」）の創出をも、視野に入れる必要が生じてくるだろう。青年に関しては、その下位分類を「青男・青女」とすることを一案としてあげておこう。

これらのことは、耳慣れないうちは違和感を感じさせることもあるだろうし、洗練の余地も多く残されている。しかし、まずは新しいことばをつくり出し、積極的に使っていく中でこそ、よりよい代替案に行きつくことも可能となるだろう。

おわりに

本稿では、二〇〇六年一〇月に実施した「新聞紙面にあらわれたジェンダー」第五回調査の一環として、そのデータをもとに、さらなる分析を加えた。

まず、新聞銘柄、掲載紙面、紙面ジャンルの三つを変数として、これまで主として単純集計や二重クロス集計によってみてきた「性別冠詞」「ジェンダーを含み込んだ職業語」「他者との関係で女男があらわされることば」、そして「さん」と「氏」の敬称の使い分け」に関して、新たに三重クロス集計ならびに多変量解析の手法を用いて、分析を行うことを試みた。

次に、これまで一般記事ではないために調査対象として扱ってこなかった投書欄、テレビ・ラジオ面のジェンダー表現について、「性別冠詞」「ジェンダーを含み込んだ職業語」「他者との関係で女男があらわされることば」「ステレオタイプ表現」に関する分析を行った。

さらに、「少年」と「青年」ということばの使用状況の分析を通して、新聞が、男性を人間の標準とみなす「隠

れたカリキュラム」を流布する役割を、日常的に担っている実態を明らかにした。

女性強調表現に関するこれまでより詳細な統計的解析からは、掲載紙面、特に紙面ジャンルとの間に、強い関連があることが明らかになった。加えて、新聞銘柄との一定程度の関連もみられた。

また、女性強調表現と男性強調表現の分量および種類の比較においては、女性強調表現の方が出現頻度が高くかつ種類も多くみられ、女性を有徴化する傾向が強いという、男性表現との間の不均衡が目立った。

さらに、「氏」と「さん」の敬称の使い分けに関する統計的解析からは、ジェンダーのダブルスタンダードがいまだ「健在」であることが判明した。

投書欄で使用されている語の分析からは、掲載面が限定されている関係上、数量的には少ないものの、新聞本紙とあまり変わらない女性強調の実態が明らかになった。投書欄に投稿する読者のジェンダーに関する言語感覚は、たとえば本紙ではほとんど眼にすることがなくなった「主人」ということばが、そこではいまだに使われていることからなどから推察して、新聞の作り手以上に保守的であるといえるかもしれない。

テレビ・ラジオ面における分析で明らかになったことは、これでもかこれでもかという「ジェンダーの氾濫」の実態である。これにより、テレビが女性を売り物にしてなり立っている現状が改めて浮き彫りになった。ただ、人名を下の名のみで扱う表現にみられるように、男性も、テレビという「怪物」の前では、「ひと」としての存在を剝奪されがちであるように見受けられる。

「少年」ということばは、字面からはジェンダーがみえないにもかかわらず、圧倒的に男性の年少者をさす語として使われているという実態が明らかになった。また、法律用語などでは女男を含む年少者をあらわすとされながら、その背後に見え隠れする人間のイメージは、やはり男性である。

「少年」に対しては、「少女」という語が存在するものの、「少男」ということばはなく、若い人一般を含意する少年と、女性のみをさす「少女」は、対称的で対等な用語であるとはいいたい。「青年」に関しても同様である。

本紙記事のみならず、投書欄、テレビ・ラジオ面など、新聞紙面のあらゆる部分において、女性であることを強調して男性から区別するジェンダー表現が造語され、多種多様に用いられ、繁殖¹⁾している。また、「少年」や「青年」のように、一見ジェンダー・ニュートラルであることを装いながら、その実男性を表現している語も、それらもつ影響力についての吟味がないまま、日々の紙面で使われ続けている。

こういったことば・表現は、新聞の作り手が意識さえすれば、少なくとも紙面上では減らしてゆけるはずである。また、新聞は、メディアの中で最も高い信頼性を獲得していることから、それらの語義を解説するなどして、読者を啓発していくことができる条件を備えているといえるだろう。テレビなど他メディアに対して、また教育、政治、世論に対して影響力を持つ新聞が、ジェンダー表現に関し、自らを意識化し、それを変革して行くことの意義は決して小さくない。

ことばは変化し、また変化させることができる。ジェンダーに関することばを変えていくことによつて、女性のみならず男性もまた、性のくびきや思い込みからより自由になれるはずである。新聞は、自らの紙面がことばと表現をめぐる政治的アリーナでもあることを、いま一度認識すべきではないだろうか。

注

(1) 田中和子・女性と新聞メディア研究会「ミレニアムを通過した新聞ジェンダー表現の現在——『新聞紙面にあらわれたジェンダー』第五回調査を中心に——」『国学院法学』第四六巻第四号、二〇〇九年、五五〜一三四頁、参照。

(2) 田中和子・女性と新聞メディア研究会「新聞において女性はどうのように表現されているか——『新聞紙面にあらわれたジェン

- 「ダ」第四回調査を中心に——『国学院法学』第四三巻第四号、二〇〇六年、八六～一八八頁、一四七～一五〇頁参照。
- (3) 田中和子他、前掲、二〇〇九年、五八頁。
- (4) 大隅昇「対応分析法・数量化法Ⅲ類の考え方」、二〇〇六年。 http://wmreview.comquest.co.jp/wmtips/pdf/20060910_3.pdf
- (5) 伊藤雅光『計量言語学入門』大修館書店、二〇〇二年、四一頁。
- (6) 記号論的にいえば、対称的な二項対立ではなく、有徴性のしくみをつかつて性別を暗示する構造になっている。
- (7) 職業語は、性別冠詞つき表現に比べ種類(異なり語数)が少なかったため、閾値を下げて表示される数を調整した。
- (8) 杉浦正『新聞事始め』毎日新聞社、一九七一年、二二七頁。
- (9) 影山三郎『読者の言論——増補版・新聞投書論』現代ジャーナリズム出版会、一九七六年、九〇頁。
- (10) 同書、一四三～一四四頁。
- (11) 同書、二二二～二二三頁。
- (12) 毎日新聞社生活家庭部編『女の気持ち「二〇〇一・四～二〇〇三・一〇」』求龍堂、二〇〇四年、二二二～二三四頁。
- (13) 川嶋保良『婦人・家庭欄こと始め』青蛙房、一九九六年、六〇頁。
- (14) 同書、一五八頁。
- (15) 同書、八九頁。
- (16) 同書、一六六頁。
- (17) 見田宗介『現代日本の精神構造』弘文堂、一九六五年。本書所収の「現代における不幸の諸類型——〈日常性〉のそこにあるもの」では、読売新聞の人生相談が分析され、たとえば「欠乏と不満」「孤独と反目」「不安と焦燥」「虚脱と倦怠」の四つの基本類型が抽出されている。
- (18) これら、家庭面(生活面)における女性の投稿者たちがつくったグループによる投稿集として、たとえば①影山三郎・中村智子・草の実会編『女にとつての戦争「1」——「ひととき」欄の三〇年から』、および『女にとつての戦争「2」——「ひととき」欄の三〇年から』田畑書店、一九八二年、②毎日新聞女の気持ちペングループ『復刻版 女の気持ち——創刊号～二十五号——』女の気持ちペングループ神戸会、二〇〇四年、③女の気持ちペングループ・毎日新聞大阪本社学芸部『別冊・復刻版 女の気持ち 戦争特集』女の気持ちペングループ神戸会、二〇〇七年、④読売新聞婦人部・こだまの会編『女がつづる二五年』読売新聞社、一九八

二年、などがある。

(19) 朝日新聞社マーケティングセンター「二〇〇七年 新聞読者基本調査 結果集計」朝日新聞社、二〇〇七年。

(20) ただし、『国学院法学』第四六巻第四号掲載の前稿で用いた集計データには、従前通り、これら投書等のデータは含まれていない。

(21) 「婦人」を「職業語」に分類していいかどうかは議論の余地があるが、これまでも女性の性を含む職業語に分類してきたので、今回もそれに準じた。

(22) たとえば、投書欄の紙面で、「投稿にあたって」の告知に際して、「主人」や「主婦」ということばは、かくかくしかじかの理由、方針により使わない」というような解説や表明があってもいいのではないだろうか。

(23) 日本新聞協会広告委員会『クロスメディア時代の新聞広告Ⅱ 購買満足と新聞エンゲージメント——二〇〇七年全国新聞メディア接触・評価調査』報告書』日本新聞協会、二〇〇八年。

(24) 朝日新聞社マーケティングセンター、前掲調査。

(25) 田中和子・女性と新聞メディア研究会「新聞は女性をどのように表現しているか——『新聞紙面にあらわれたジェンダー』一九九六年調査より——」『国学院法学』第三六巻一号、一三七—一四四頁、田中和子他、前掲、二〇〇六年、一〇六—一三三頁、および田中和子他、前掲、二〇〇九年、八三—八七頁参照。

(26) 中村桃子『ことばとフェミニズム』勁草書房、一九九五年、二四頁。これを中村は、「人間≠男観」と呼んでいる。同書、二五頁。

(27) たとえば、フィリップ・アリエス、杉山光信・杉山恵美子訳『子供』の誕生——アンシャンレージュム期の子供と家族生活』みず書房、一九八〇年に、その示唆を得ることができる。すなわち、人生の諸時期に対する専門ことばは、古代以降さまざまあったが（子ども、小児、若者、青春期の少年、老人、老衰など）、その実（ここではヨーロッパ、殊にフランス）中世の社会では、子どもが「女手」を必要としなくなると、すぐに大人の社会に属していく。また、イギリスでは、他家に奉公に出されるため、子どもないし青少年と奉公人との間にはあいまいさがある。「青年」ということばが、少年期と大人との間の時期として位置させられるようになるのは、近世以降の学校教育の変遷に関連している。「青年」は、学業生活の後期ないし終了後の、実生活を送らない時期をさしている。ところが、そもそも「少女」は、学校には属することができない。「少女」には「青年期」はない。女性は、

「少女」の次には、「女」になるしかなかった。

(28) 中村桃子、前掲書、二五頁および三一頁。

(29) 飯島祐子、島村輝、高橋修、中山昭彦編『少女少年のポリティクス』青弓社、二〇〇九年、一一〜一二頁。

* 共同執筆者

田中和子(国学院大学法学部教員、諸橋泰樹(フェリス女学院大学文学部教員)、岡野雅雄(文教大学情報学部教員)、須藤典子(栃木県立国分寺特別支援学校教員))